

明治二十八年七月五日發兌

女鑑

第八十九號

東京國光社

女鑑第八拾九號目錄

大婆公



婦人の任務及其の任務を完うすべき方法を明にす（五）

（へ） 道德上の事務

儉を勤め、奢を省し、惰を愼み、精を竭すは、婦人最上の美德なり。家庭を修治し、義理の節、人情の彜、適宜に行ひ、應分を施して、欠ざるは、婦德の重く大なるものなり。夫婿に仕へて貞靜に、子女を率ゐて仁信を、父母に孝事し、婢僕を慈視し云爲禮あり。眠食度あり。篤く衞生の道を重じ。深く敎化の義を敬ひ。人に接はる方を以てし。世に處する禮を先とし、謙りて慢らず。寛にして急からず。婦人

あること此の如きは、只、其の家の利のみならんや、實に、國の大幸なり。蓋、婦人は、萬事の本、百物の素なればなり。

あるが中にも、着實溫和、質素を勉めて、而して、儉約を勵むが如きは、最、婦道の急に居る。常に、謹みて濫費を戒め、冗費を去り、漸に積み。徐に息し。此に殖し。茲に倍し。遂に大に富み且貴く、而して、永く逸せむは、豈、甚、樂しからずや。假令、大に、富、且、貴く、而して、永く逸して、以て、甚、樂しむ迄にはあらずとも、相當の貯蓄を爲し、必要の策を立て、此に因りて不時の難、意表の變に應せむは、是、即、人の本分、はた、良民の責任たり。

美居美服美食するも、義理人情を知らざるは、是、其の人、馬牛にして襟裾するに過ぎざるのみ。蓽門蓬髮、弊衣藿羹の人と雖、長上を侮らず、閭重と交り

て忠信ならば、其の人眞の貴婦にして、天命に達するものと稱せむに障あらじ。
之を要するに今の風は、古の風にあらず。古の女子は、己を喜ぶ者の爲に容つくるを以て能とせりしが、今は、只、形の美、色の麗のみを專とせずして、實に器識の群を拔き、藝業の世に秀るを、旨とする風とはなれり。乃今の女子たるものは、主として道德の本を治め。以て其の品位を崇うし。其の威儀を尊うするを、須急とせざるを得ず。吾人曾て之を思ふに今世婦人の覺悟すべきもの、蓋、左の三義ならむか、

一を道德と云ふ　松下禪尼の類

二を節義と云ふ　靜女常盤の類

三を美人と云ふ　小町、佛の類

禪尼、靜女、佛の諸人、其の品行世の人の早に知れる所なれば、今、特に、云に及ばず。或は云はく、紫式部、尼將軍、春日、阿茶の如きは、禪尼とともに竝ぶべしと。其はともあれ、以上の別は、吾人の私見に屬すと雖、是必しも、甚しき誤謬あることと勿るべし。蓋、何等の美色とても、其の榮は春夢の如く、廢は秋扇の如きものは、婦女平生の例となす。古既に然なりき。況、今の世上をや。美人最下に居る　之に由る。

有情は無情に勝る、節義なきは、有るに加かざること、固より論を俟たざれども、而も、節義は、何故に平常に見はれずして、特り艱難に見はるゝか　。是れ由來吾人の思ふて甚惑ふ所なり。惟ふに尋常の際と雖、必、之なきに非ざるなり。豐盛の家とても、其の人あるべきことと疑はず。只古今の例に於て貞操た

る所以のもの、必艱難の中に在て飽安の裏に在らざるは、豈其の事の奇激にして、其の行の世の耳目を聳動するに因らざらんや。且、其の人乏しからず、時時旌表の榮を擔ひ、往々褒賜の賞を受く。蓋亦嘉みすべし。庶くは、風を扶けて化を濟ふべければなり。然りと雖、難きに就いて常ならざるの名をなすは、寧其の易きに處りて、無事なるの善きに如かず。是、婦女の分にして、其の天の職となす。

若夫、道德とは、才熟して行完きの謂を云ふ。仁義綱常といふの類は、あげて其の包羅に委す。是、其、廣きは天の如く、大なるは雨露の如く、能く群物を保育して、萬有を潤養す。之を云ふこと難しと雖、喩へば即、米穀、布帛、其の物に似たりといはむ。之なければ、吾人、一日も生存すべからざればなり。

絶壁千尋、素練懸り、萬雷鳴り、白雪飛ぶは、奇は則奇ならむとも、事に於て何をか爲さむ。千紫萬紅、鳥聲關關、艷は寔に艷ならむも、眼を轉じて塵となる。汪洋たる水田、萬頃の水を湛ゑ、千束の稻を植ゐ、綠葉青青、微風徐來の光景は、固より、必しも、奇にあらず、妙にあらず、只、尋常の風にして、普通の觀に過ぎざれども、其の間眞味あり、無量の風趣を寄するに至りては、決して彼の懸崖瀑布、春園花鳥の華のみにして實なきが如きにあらず。古往今來、世の隆汚、人の盛衰に關はらず、獨、聖道の悠然として永く存ずるある所以のもの、亦、徒爾ならざるを察すべし。聖人の道既に然り。婦人の事、何ぞ、特に、然らざるの理あらむや。

婦人は必醜なれかしとは、吾人、敢て之を云はず。婦人は、無節不義なれとは、

亦、固より、之を言はず。唯、容貌の是非よりも、節操の有無よりも、寧、道德の如何を顧ふぞ、緊要なることは、吾人、實に之を言ひぬ。是吾人の深く信じて疑はざる所なり。知らず、世間の貴婦人は、美人たらむか、節婦たらむか、將、道德家たらむとするか。

論説

婦人の帶を袴となすべきの説

宮地嚴夫

余曾て聞けることあり。曰く、世界各國の婦人の習慣風俗に關して、大ひに弊害となすべきもの三ありと、曰く歐州婦人の服裝の爲に、腹部を甚く締細むることなり。曰く支那婦人の強て足を細くせんとして。不具者となすことなり。

曰く日本婦人の服裝の帶の幅の廣きことなり。此外或は耳に穴を穿ちて鐶を懸るあり。或は身に文するものありて斯る類の者猶ありと雖も。其は婦人のみに限りたる習慣とも爲すべからず。又廣く其地一般の風俗とも云ふ可からざれば、先前ま擧たる三者を以て。世界婦人の三大弊害なりとすと云ふ。然るに同じく稱して、世界婦人の三大弊害なりとは云ふと雖も。中に就て之を別つに。歐州婦人の弊害に於るも。支那婦人の弊害に於るも。皆其自己の身體を害ひたるものにて、今之が矯正改良を計らむとするも。一端此弊害を受たる以上は。其身を終るまで。之を元の完全なる體軀に復さんことは、到底望むべからざるものなり。實に哀れむべきの事にあらずや。而して日本婦人の弊風なりとする。帶の幅の廣きが如きは。唯服裝上に止まりたる弊まて。身體には聊も傷害を及ぼさ

ざるを以て。之を改良矯正せんと欲せば。今日より直ちに實行するも。更に差支を見ずして。之を爲し得らるるは。同じ弊害ながらも、其弊害の甚淺きものにして。是亦一ッの僥倖なるものと云はむか。是に於て熟按するに。我國婦人の帶の幅の廣きには。之を廣くせるに就て。何か理由の有ることならむか。或者は。此は腹部と腰部とを暖むるの意に出たるものにて。全く衛生の爲に起れるものなりと云へども。其は之を辨護せんとて。帶を結びたる有樣に就て。假に設けたる說にて。固より根據あることに非ず。元來帶の幅の斯く廣くなりたるは。嚮に落穗集の說を引て。說明し置たる如く。元祿の始め頃より起りたりと云へば。僅に貳百年來の事にて。然も其始まりは。腹部腰部等を暖むるの意に出しにも非ざれば。又衛生の爲に起りしにも非ずして。唯一時の流行に因て

始まりしが。遂に世間一般に行渡り。永く行はれて變ぜざるより其結果今日の如く。我國婦人の風俗とはなりたるものなり。其は彼落穗集を見て知るべし。然れば此幅廣き女帶は。我國上代よりの風儀にも非ず。又是と云ふ必要も無れば。我國粹保存の爲めに。少しく可笑くても。強て維持し置ねばならぬと云ふ程のものにも非ざるは。又多言を要せざるべし。而して此女帶我風俗の上に採りて。優美にして雅致ある美風なりとなさんか。吾人日本人に在りては。固より二百年來。母の胎内を生れ出しより。晝夜朝暮の差別なく。常に見馴れて、凡日本婦人の帶は斯るものなりと。腦裏に感染せられて。更に怪訝の念を起すもの無きのみならず。却て凡婦人たるものの帶は。斯く廣かるべき筈のものなりとさへ。思ひ居る程のことなれば。内國人に在りては。何とも心付ざることなれど

も。世界廣通の今日に至りて。歐州婦人の腹部を締細むると。支那婦人の足を少さくするとの二に並べて。之れを數へ入られ。世界の三弊風とさへ爲らるるを思へば。見なれぬ外人の目には。如何に怪しく之を見るか。又實際如何なる風體のものなるかを。回顧反正せざる可からず。吾人より歐州人の腹部を締細めたる。支那人の足を少さくなしたるを見れば。如何にも怪訝に堪へざる次第なるに。彼は又之と同一視するに。我帶の廣きを以てせり。其彼が之を見ることの那邊にあるかも。亦知るべきのみ。且我に於ても虚心平意に之れを考へ見るべし。抑日本婦人の帶を結びたる風體に於る。先身幅廣き衣服を着て。襟を前にて深く左右に遣り違へ。腰紐にて下締をなし。其上の腹と胴との所を。幅廣き帶にて之を巻き。其結びめを。大きくなして。背部より腰部にまで及ぼして。

之を置きたるものにて。婦人に在りては。最も取締を要すべき。裾の方は却て着流しの儘にて。唯前にて遣り違へたるのみなるを以て。動もすれば。坐する時は。下に着たる湯巻裾除など云ふもの。膝の間より顯はれ。又歩行く時も足を運ぶに隨ひて。ひら〱と之を褄下の間に呈はし。若道路にて烈風などに遭ふことある時は。唯湯巻裾除などの褄下の間に呈はれ出るのみならず。脛より太股のあたりまでも。吹き露はさるるを。手を以て防ぎ難る狀など。屢見る所なるは。決めて美風となす可からず。特り美風となす可からざるのみならず。婦人の服としては。甚不用心なるものなり。而して何にもならぬ。實は無用に屬すべき。幅廣き帶は腹部に卷て。大なる結びめを。其背部腰部の間に留む。見馴れぬ外人の之を見て。弊風の一とするも。亦故無きに非ざるを知るべし。思

ふに。我國も今回新に臺灣を得て。領土は漸次に廣くなり。其他追々殖民地をも求むべく。隨て我國の風儀の世界に膨脹すべき。時期到來せる今日に際し。男子の服裝のことは。暫く措て之を云はず。差向き婦人の服裝の如き。今申し述べたる如く。甚不完全にして。世界婦人の三弊害の一に。數へ込られつつ有るまゝを以て。之を膨脹せしめむは。如何にも遺憾を極むる次第ならずや。然も此女帶。我國數千歳の遺風にても有らむには。其遺憾なるをも猶忍ひて。之を保存するの必要無なきも非ざるべけれど。僅かに二百年以來に一時の流行より起りて。世間に廣まり。武家以下に於てこそ。一般の風俗ともなりたれ。九重の雲の上までは及ぼさざりし位のものにて。既に宮中に於ては。明治維新の後に至りて。洋風の服裝をば。用ゐらるることともなりたれども。其前に在

りては。女官方は專ら掛衣紅袴等を用ゐられたるものにて。今日に於ても多くは常に掛衣紅袴を用ゐられつゝ有りて。宮中に於ては。幅廣き女帶を用ゐられしことは。未だ曾て之あらざることなり。然れば今日に在りて。此女帶を改めたればとて。さのみ惜むにも足ざるべし。是を以て余は常に此婦人服裝の改良に對して。一の意見を懷けり。今之を開陳して。同感なる諸氏の參考に供せむとす。其意見たる。余は華族女學校の近傍に住めるを以て。此校に出入する婦人を。日として見ざること無し。而して其服裝たる。中には偶〻洋裝を用ゆるもの無きに非ずと雖も。其は僅かの人員にて。全數の九分以上は。皆和服に袴を著けたり。其風體優美雅致ありて上品なり。中に就て袴の上に被風を著たるもの最も好し。又羽織を着たるも惡しきにあらず。被風羽織を用ゐず。袴のみな

るも亦可なり。之れ彼身體に不相應なる。洋装を着たる者に比すれば。其優りたること。實に幾層なるを知るべからず。斯の如きは。孰れの國の人に見せしむるも、更に恥かしからざるのみならず。其好評を受んこと。蓋、疑ひ無きものならむ。然るに我國婦人帯の幅たる。非常に廣きものなれば。此を改めて袴となさむに。其用ゆる所の卷物反物。及び絹布等の類。之を費す寸尺に於ては。又大差無るべし。然れば經濟上に於ても。亦大差無きことと云ふまでも無れば。之を實行せむこと。亦容易なるべきのみ。而して日本婦人の上に取りては。世界中の三弊害の中に數へ入られてありし。幅廣帯を轉じて。各國に於ても好評を受べき美風の袴となし。又烈風に出遭ひても。困難して之を防ぐの心配なく。極めて用心宜しき服装となりて。外見の上より云ふも。實用の上より云ふも。頗

る兩全のものとなるのみならず。經濟上に於ても。毫も損ずる所無くして。我國二百年來の弊風を正し。我風化を進步せしむるの一端ともなり。大いに國家を利することとなれば。力めて斷行せざるべからず。故に余は一日も早く。此說の實行せられむことを冀望するものなり。同感者を求めて止ざるものなり。而して余は此際凡日本人たる者は。貴賤貧富を論ぜず。老若長幼を云はず。都鄙に普く此說の行はれんことを望むと雖も。凡風を移し俗を化することは。必ずしも議論の如く行はるるものに非ざれば。先貴顯縉紳として。世の上流に在る。貴婦人方より。速に之を實行して。世間一般の師表となり。之を率先せられんことを冀望するなり。斯の如くなる時は。自然に之を見習ひて。漸次に普く行はるるに至るべし。而して此事既に世に行はるることとならば。其色の如き。其

裁縫の如き從前に在りては。一定の法ありて。宮中に於ては。未婚者は濃色を用ゐ。結婚者は緋を用ゐられしと云ふ如くに。自然に一定法も立べきなれども。差向きたる所にては。裁縫の如き襠あると。襠無きとを問はず。又色めの如きも。先制限を定めず。或は縞にても苦しからざるものとして。今日の所にては。唯速かに行はれ易きを主とするに在り。是婦人服裝の改良に對する。目下の急務なり。讀者必ず之を忽諸に附すること勿れ。

女子處世論（二十一）

三輪田眞佐子

第二十　日本女子たることを忘れず

一定の見識なきものは、浪のまに〳〵漂ふ浮萍の如し。誰か、これを信ぜん。あ

はれ、人、既に、これを信ぜずば、何をもて、世に立たん。處世の道を悟らんと願ふものは、深く、この理を知るべきことにこそ。見よ。見識定まらざる女子は、父母の心を安んずる能はざるより、從ひて、孝行を盡し得ず。良人は、胸襟を開かざるを以て、夫婦の眞味を知り得ず。なほ、婢僕にさへ、蔑視せらるゝことあるを免れざるべし。蘇洵いはく、「家に、主母ありてこそ、豪奴、悍婢、敢て、弱子に抗せざるなれ」と。實に、一定の見識を有たざる女子は、かゝる主母の任に堪へざるべし。

勿論、一定の見識を懷くべきことは、何人にも必要なれど、殊に、日本の女子は、その日本の國民たることの觀念を有ち、我が國の風土、文物、たよび、制度に適する覺悟を定めて、生活をなさゞるべからず。故に、日常の飮食、衣服、

業作、および、交際など、弊害なきかぎりは、日本の習慣を改むることなかれ。若、この習慣に背かんには、世評あしく、遂に、擯斥せられ、我が國固有の笑ふ山も、其の身を迎へず、歌ふ川も、敢て、樂を與へざるべし。たとへば、近來、洋服の女子少くなりぬるも、かゝる自然的牽制のためにや」。まして、皇國の風は、忠孝節義をたふとび、必、これを實踐せり。若、刹那、この心を失はんか。もはや、一日も、安堵すること難からん。故に、櫻井の驛を過ぎ、楠氏の母を聯想し、以て奮起し、碓氷峠を越ゆ、橘媛の貞操を回思し、以て感發するばかりの女子にあらずば、何にまれ、彼にまれ、人の信用なかるべし。

あはれ、今日の女子、能く、世に、身を處せんとて、父母を離れ、兄弟に別れ、

遠く、海山へだてたる異鄕にさへ、遊學し、寒暑を厭はず、苦學し、以て、心身を勞しながら、反りて、女學生風の女子は云々と忌るゝは、實に、口惜しき次第ならずや。さりとて、駸々乎として進みゆく今の世に、一丁字だに知らで、蟄居し、單に、三味線の技のみに安んじ、天賦の女智、女德を養はざらんか。いかにして、將來、善良有爲の國民をつくり得ん。あはれ、この皇國をいかにせん。

畢竟、女子の、かく、一日も、缺くべからざる學事を修めながら、世評あしきど、其の情態の影響して、遂に、蠢々たる無學の女子、多數を占むると、二の結果を招きし原因は、先進の女子、その日本の女子といふ身分を忘れて、徒に、皮相的の藝能を修め、摸擬的の容態を爲しゝに基きけん。されど、こは、女子

自身の不幸のみならず、國家の進歩を妨ぐること、まことに大なり。いかで忽にすべきものかは。世の泛々たる輕薄の才女、須らく、猛省すべし。元來、我が國人は、空理を、口に吐くより、寧、實踐することを尊ぶなり。殊に、女子に於いて然り。されば、女子は、何ほど、才能ありとて、秋毫ばかりなりとも、耻づべき行あらば、誰か、これを顧みん。諸孃も知り給はん。吉宗將軍は、明君なりしことを。しかし、將軍をして、かく、明君たらしめしものは、實に、その母古勢氏なりきとぞ。

抑、吉宗、はじめ、三萬石の小諸侯に封ぜられけるが、後、將軍の職を襲ぐに及びて、その母、つね〴〵言ひけるやう、汝、三萬石な忘れぞとて、ふかく、將軍を訓戒せしとかや。おもふに、かゝる婦人こそ、よく、日本固有の女風を行

ひたりとはいふべけれ。果して、能く、世に、身を處せんと思ふ女子は、かゝる婦人を學べかし。

史談

大婆公

大町桂月

徳川二代將軍秀忠公、その父、家康公の機嫌伺ひにとて、駿府にいたりて、滯在したまふこと、數月に及びぬ。家康公、ひそかに、老女阿茶局を召して、將軍は今血氣盛りの青年、定めて徒然に堪へざらむ、そなたの娘、阿花に茶の道具ども、もたらして、左右に侍らしめなど、その徒然を慰むることもやなど、仰せられけるに、阿茶局、かしこまりて、その由、人して秀忠公に申し上げ、さて、阿花を呼びて、くはしくその意を言ひふくめて遣はしぬ。阿花時に年十八にて、花も耻ぢらふばかりの美人なるに、とりわけて、今宵は意を凝らして粧ひたれど、その美しさ言はむ方もなし。かくて、腰元一人從へ、後庭の月を蹈みて、公の館に至りけるに、公は待ち設けたることゝて、居ずまひもくづさず、禮服いかめしく粧ひておはしけるに、忽ち音なふ聲を聞かして、自から立出で

て、阿花を迎へて座に請じ、そのもたらし來れるものを受取り、父よりの賜物、難有く頂戴しぬとて、打解けたる樣は見えず、やがて、阿花をうながし立てゝ、また、自から雪洞さけて、之を送らすること、賓客の如くなりけれど、阿花茫然として爲す所を知らず、還てこれを阿花局に語りけるに、家康公聞かして、將軍の謹厚なること、能く玆に至れるか、われ、たとひ梯子を掛けても、之に及ぶ能はずとて感嘆せられけるとかや。此一事以て二代將軍の人となりを知るに足る。公はまことに、温厚謹直にして、その心事極はめて公明正大なる賢君におはせり、而して、公の性質には、賢媼大婆公の影響を及ぼせること、極はめて大なりといふ。

蓋し、乳母は、第二の母なり。たゞに其乳の良否が、その乳兒の躰の强弱に關係するのみならず、其人柄の如何も亦乳母の性質に大なる影響を及ぼすものなり。人やゝもすれど曰く、愚かなる乳母の乳を呑めど、その子も亦愚となると、是れ愚なることの、乳より傳染するにあらず、日夕親しく之に接するのあまり、知らず〳〵之に感化せらるるなり。さるに、今の人、乳母を選ぶに、醫者に其乳を分拆せしめて、其良きものを取りて、更に他を顧みざれども、かくては、子の爲に宜しからず、乳の良きと共に、人柄の良き者を選はざるべからず、われ、大婆公の傳を讀む毎に、益、乳母の賢なるものゝ必要を感ず、秀忠の賢君となれるには、大婆公與つて大に力あれどなり。

太婆公は、實に、二代將軍秀忠公の乳母なりけり。三河の人なれど、其の姓名は詳かならず、唯、人呼んで大婆公と云へり。その性いと賢くして、しかも、その心の堅きこと、丈夫の風ありけるが、夙に秀忠公の乳母となりて、心を盡して之につかへ、誘導啓發する所、少なからず、公其の篤志に感じて、渥く之を眷遇したまひて、老に及びても衰へず、大奥の女中の中にて、又となき光榮を被りけり。

かく、光榮を被りたれども、もと、謹厚の人なれば、つゆ驕りたかぶるさまはなく、唯、一つの慰みあり、其は、他ならず、毎月二三回、駕夫、僕隷どもを、盡く食堂に集めて、一同に飯を振舞ひ、自から之が給仕して侑めけるほどに、皆其の志に感じ、舌打鳴らして飽食し、腹皷打ちて喜ぶを見て、平生の娛樂となす事是なり。

或日、本田正信、其樣を見て、いたく驚き、大婆公よ、御身は將軍の乳母にれはさずや、御身の使ふべき婢女は多かるに、何を苦んでか、輕々しく下郎共の給仕はしたまふと問ひぬ。正信は、當時幕府の執政にして、言はゞ今の內閣總理大臣の如き重役の人なり。大婆公、其の言葉を聞きて、さつとなりて衣紋を正し、本多殿にも似合はざる御言葉をうけたまはるものかな。この頃、人の噂に、御身はいたく驕りたまふ由を聞きぬれど、よもや御身ばかりはと思ひて、まことゝはせざりしに、今はじめて、其のいつはりごとにあらざる事を知り侍りぬ。うたてや、御身ははや、彌八郞と呼ぴ

れし時の事を忘れたまひてか。妾昔未だ宮仕へせずして微賤なりし頃は、人に一椀の飯を惠む事だに、心に任せざりき。さるに、今は此通りの大馳走を設けて數十人の下位に振舞ひて、之を喜ばすことを得るも、思へば是れ皆君の御恩なり。今の富貴になれ、昔の貧賤を忘れて可ならんや。御身は天下の大老とも言はるゝ身なるに、これをこれ察せずして、御身を輕ずるなど仰せらるゝは如何にや、かゝる御心得にては、世人が御身の事を、驕れりといふも、僻事にはあらじと思ひ侍るなりと、理のある直言に、正信いたく耻ぢ入り、言葉もなくて立ち去りにきといふ。直言人をくじくは、必ずしも女子の能事にあらず、されど、大婆公の正信をくじきしが如きは、君を思ひ、國を憂ひ、又正信の身の上を思ひやりての直言なれば、亦其むを得ざるなり。

大婆公の病甚しき時に及び、秀忠公親から之を見舞ひて、之を慰問せられけるが、定命免れがたく、最早旦夕をも待たぬ露の命なり。公、其の手を取りて、何か言ひ遺すことはなきかと問はせけるに、大婆公はそゞろに感涙をながし、妾また何をか申すべき、唯、區々たる老婆心に願はしきは、よく御父君樣の御遺訓をまもらし、心を政治につくさせて、後人に後指さゝれ給はぬやう心せさせたまはるべくなむといふ。其の外に、一身上の事には、何も請ふ所はなきかと問はせたまふに、是迄の御恩、身にあまれり。今更何をか請ひまつる所あるべきといふに、さらばとて、起たむとした

まへど、遽によひとゞめまゐらせて、さきほど、のたまひし御意のほどは、漸く解し侍りぬ。一人のせがれの、罪被りて配所にあるをればしやりたまひての御言葉にはおはさずや。彼れ、まことに罪を犯したれど、流謫せらるゝは、固よりその所にて、妾はつゆ恨むる所侍らず、如何にたよりなき女の身の、今はのきはに臨みたれどとて、昔、育てまゐらせし私恩を以て、天下の公法をやぶるべくもあらず、かくて、一子のたとひ青天白日の身となりぬとも、妾はいかでか、後やすく冥途にまかるべき。かゝることは、つゆ御心にな掛けさせたまひぞと言ひ終つて息絶ねたり。嗚呼、滿腔の熱血、唯、君に盡くして、つゆ家を思はず、死に臨むも猶君を思ひて、謹厚にして公明なること、一に此に至れる乎。大婆公の謹厚にして、秀忠公の謹厚あり。大婆公の賢なる、實に秀忠公の乳母たるに耻ぢず、家康公の乳母を選ぜせたまふや、能く其人を得たまへりと言ふべきなり。

鍛治村二孝女

羽太正養

德川家の臣正右衛門と稱す嘗て公務の爲に蝦夷にありしときのことを親しく見て志るしたるなり

箱館近在鍛治村といふ處に、清治郎と云ふ民あり。文化三寅年八十九歳なり。同人妻ひさ七十五歳なり。智養子勘之亟六十五歳、清治郎娘勘之亟妻りう五十歳、勘之亟娘きは十六歳なり。素より至て貧しき上に、勘之亟勝れざる病氣にて稼も出來

す、殊に齢も六十を超ゆれど、猶更心に任せす、仍て妻柳娘さは兩人にて、僅斗の畑作を仕付、少しの野菜杯をとりてたづきとし、又は村内其外に雇はれて、些少の賃をとるといへども、老人二人に病身の勘之亟を附置きたる斗にては、こゝろも安からずとて、一人は必家に殘り、一人づゝ出で稼を爲し、漸々、僅の米穀を求得て、老人共へは必米飯を勸め、己等は粟稗やうの雜穀を粥杯にして食ひ、漸々、其日を送り、又居小屋は土間にて寒氣堪へがたきゆゑ、兼て粟稗の殼を夥しく貯へ置、冬分に至れど爐の際へ此殼を敷、其外へあつしといふものをかさねおきて、老父母を坐せしめ、毎朝新に此殼を取かゆる事一日も怠らず、りう、さはの内一人は、此焚火にて手をとくとあたゝめ、老父母の手足より、顔の邊りまで撫あたゝめ、一人は食事を炊しく事、是又少しも怠らず、夜中は素より臥具も乏しきゆゑ、有合せたる衣類殘らず取集め、老人共へきせ、又燈油求むべきよすがもなければ、幸ひ寒氣ふせぎの爲にて、椛といふ木の皮を多く取置、是を爐火に焚て燈の代りとし、又老人共の寒氣防ぎの一助とす、二人の孝女は半夜代りに起居て、此火を焚き、夜仕事などしながら老者を介抱し、よもすがら火のたへざるやうに、心を盡す事一夜も怠る事なし。近郷其孝を稱していつくしみ、祝儀、佛事等あるとき、酒飯をふるまはんとて招けども、稼のためは是非もなし、私の事に老人の介抱を欠くべきにあらずとてことはりて行ず、夜は殊更半夜代りの務も有ど、一切門よ

り外へ出る事なし、且此所は至て貧村にて、家數、漸〻十八九戸ありて、皆、漁の手傳に雇れ、纔の賃をとりて世を渡る所なるに、近年不獵にて一統困窮のよし、金三十兩五ヶ年賦上納の購を以て、拜借を願ふにより、去冬中貸渡し遣しけるに、其内勘之亟へも金壹兩割合、村長より渡したるよし。其時勘之亟申樣は、已は病身にて稼も叶はす、漸〻妻子の働を以て、今日も送る所なれど、拜借金は有がたけれど、多分にては返納の所も覺束なけれど、金貳分拜借致したきよしを申により、則其意に任せけるに、やがて勘之亟其金を持歸り、養父清次郎に見せ、ありがたき御惠の段を吹聽し、次第に年も老ひ賜ふに、かゝる貧家なれど、何ひとつ心に任せまいらせたる事もなし。せめては此金をもて入用の時遣ひ賜へと申けるに、清次郎がいふやう、我々夫婦家内打よりて孝養を盡すゆゑ、さらに不足なし。殊に世を捨たる身なれど、金銀に望なし。汝等は正月の支度、歳末の取始末等にも、要用の品も多からむ。其用にあてよとて更にうけひかず。勘之亟さま〴〵に詞を盡して申により、然らば壹分を貰ふべきよしにて、受用し、翌朝孫娘きよを呼ひ、汝薄命にしてかゝる貧家に生れたり。ことしははや十五歳なれど、衣類其外定てはしき品も有べきに、其風情、聊、色にも出さず、父母幷に我々へ孝養を盡す、志、神妙とやいはむ。不便とやいはむ。此金は有がたくも上より下し賜はるよしにて、汝が父よりわかちあたへたる品なり。是をもつてせめて、布子の表にてもとゝのへ、

目出度新年を迎へよとて、かの金をわたへける。此娘常々老者の心にさかふ事なけれど、一應の辭退もなく有がたしとて、其儘受たさめ、其日は十二月二十七日の事なりしか、やかて箱館の町へ行き、米、味噌、醬油、其外正月要用の品をとゝのへ殘たる錢にて、古着の木綿袷をひとつとゝのへかへり、祖父母父母へも見せ、殊の外歡びたる躰にて、其袷をねんごろに仕立置たる所、大晦日の頃より甚だ寒氣つよく、凌ぎかたきにより、彼袷を取出し祖父にきせ、己は正月に至りても、やはりあつしとて、蝦夷人の着る木の皮にて織たる服だけの物を着て、聊もはづる色なく嬉しげに孝養を盡しけり。

近村此二婦の孝を稱して止ず、遂に場所掛の石坂武兵衛まで訴へ出でたり。其時安綸箱館在勤たるゆゑ、事の始末を糺明するに、段々前文に述る通りなり。仍て其行狀を具に記し、安綸府に歸るの後、同年八月十七日、伊豆守信明朝臣へ呈進し、御褒美を願ひ申せしに、りう、きは、へは、御褒美として白銀十枚、淸十郎夫婦へは孝養として各一人扶持生涯下し賜る旨、九月六日同朝臣より達し賜ふ。則箱館にて淸次郎夫婦、勘之亟夫婦、孫女きはと呼出し正養より右命の趣を申下す。かくて淸次郎、己が居村へ歸るやいなや。右拜賜の白がねと申渡書とを持、妻子孫女まで不殘引具し、其處の鎭守稻荷の社へ詣で、是を備へて厚く拜をなし、夫れより宿へ歸り、座敷の正面に新らしき樽をすゑ、其上へ板をのせ紙を敷、火を打て

清め、かの白銀を申渡書とを其上にかざり、神酒を捧げ燈明をかゝげ、清次郎、初め家内五人拜禮し、一同に泪にくれたる斗にて、更に詞も出ず。夫れより村中及び、近郷上山村舩田村などへも吹聽せよとて、柳を遣しけるに、頓て彼村々のものども寄集り、村役人は各麻上下にて來り、共々に御惠をかしこみて、歡を盡す事限りなし。扨彼來り集りたる者共、白銀とやらむいふもの、つひに拜みたる事のなければ、くるしからずば、をがませて給りなむやと一同にねがふにより、則清次郎嗽手水して恭しく取出して拜せけるに、皆掌を合せてぞ拜みける。

夫れより彼神酒をいたゞかせ、猶外に少しく酒肴を用意もして彼者共をもてなしてぞ歸しける。かくて彼拜賜の白銀の内一枚と、さきに正養が鍛治村へ至りたる時、とらせたる金子と官吏高橋三平、大島榮次郎、山田鯉兵衛、石坂武兵衛等があたへたる金子は、各其内を少しづゝ除置、紙幾重かに封じ、彼白銀と共に新たに箱を作りて納め、非常の時は直にゑりにかけて、持退かん爲めに、其箱の紐を付け、神棚へ納め置、家内一同、朝夕此箱に向ひて拜禮し、朔望には神酒を供へ、燈明をかがげ、又毎朝門口へ出て箱館の方に向ひ掌を合せ、拜をなす事一日も怠らす、かくて勘之丞は病身きはも年頃に成りたれは、相應の聟をとらんとて、兼々撰びけるは箱館の町人、和賀屋孫三郎方に七年以前より働き居る三郎と云ふ者、南部三の戸の生れにて、きはめて朴訥なりと雖も、又貞實並ぶ方なければ、此者をもらひて聟にせまほしく過しすより、度々媒介を以て言ひ入ると雖も、

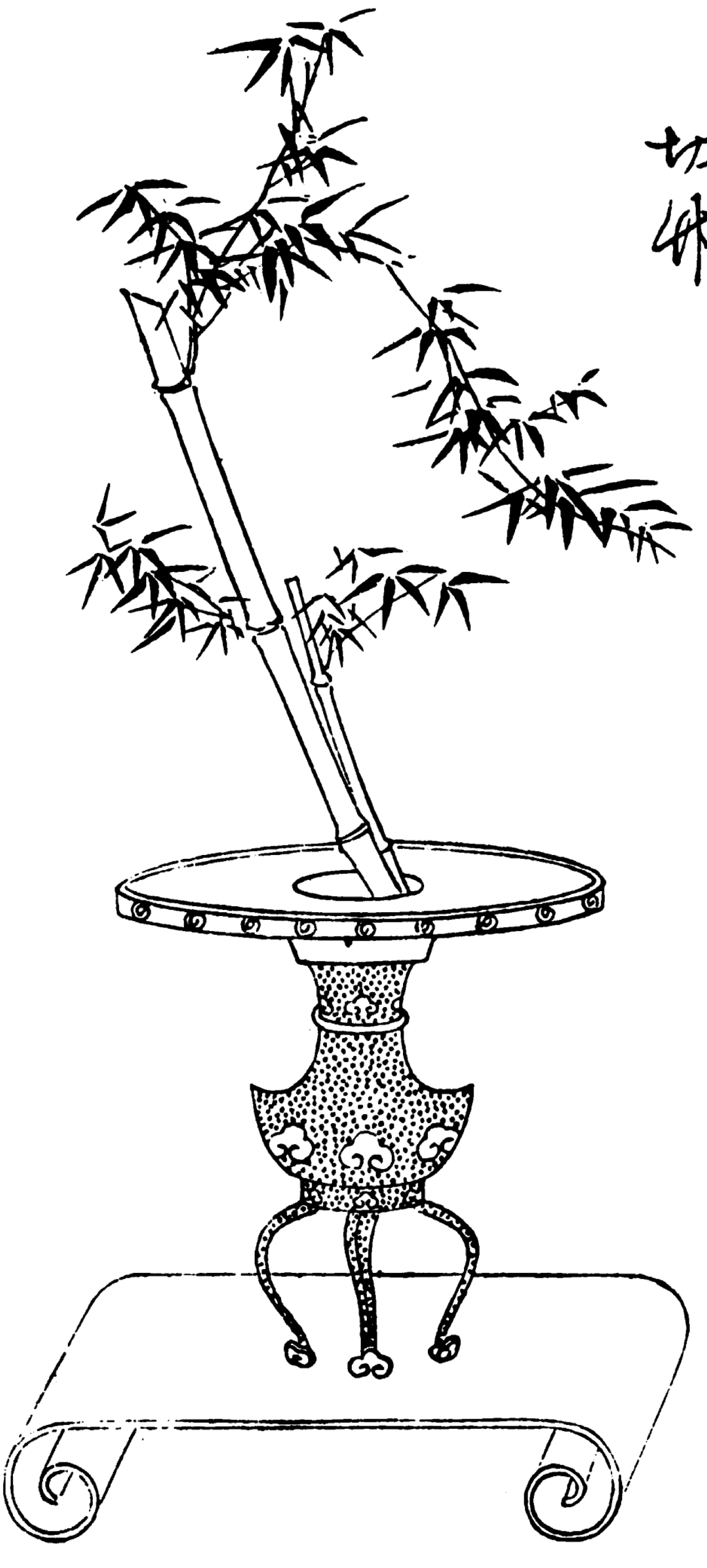
孫三郎方にても是迄多くの人もつかひしか、三郎の如きものは又得がたしとて敢てゆるさず、空しく其儘に過しけるが、はからずも清次郎一家、こたひ莫大なる褒賜ありけるよしを孫三郎聞き及ひ、感嘆に堪へず。かゝる果報いみしき者よりの望なるに、なんぞ吾一奴を惜まんや。さぞかし目出度家なれど、われも一家のちなみをむすばんとて、孫三郎はかの三郎か親元となりて、翌卯年二月、三郎を清次郎が方へぞ遣しける。清次郎の家内歡ぶ事大方ならず、則ちはにめあせたり。其夜清次郎、三郎に盃をわたへ、第一汝に申すべき事あり。吾家の重寶は是れなりとて、神棚より彼箱を取出し、御恵の莫大なるをことゞゝく說きかせ、汝も亦子孫に申つたへ命にかへて、此箱を大切にせよとくり返しゞゝ示しけるに、三郎及ひ其坐に居合せたる一族村役人等にいたるまで、一同感涙にむせび、廣大なる御恵のほどをぞ仰ぎける。是れよりさき同村嘉之助と云ふものゝ孫に、八九郎といふあり勝れたる惡少年にて、所にても、もてあまし、久離にてもせばや杯議し居たるに、彼二孝女の行狀、近村頻にもてはやしけるにて、八九郎深く心に愧、夫より行狀を改め、產業に精を出し、天晴なる若ものとぞなりける。是は二孝女の公褒より以前のことなり。是德不孤必有隣との本文に闇當したるとぞ覺え侍りき。（休明光記に據る）

家政

いけ花（圖入）（つゞき）

井上頼文

二日の華
切竹(きりだけ)



同都
廣安斎栄甫

三日の華

白梅（はくばい）



同都　松古齋景甫

漫録

士を見るに貧に失す

小山田與淸

一とせの春、飛鳥山の花見にまつれるに、つれの藩士なりけむ。七八騎駒並て出來しか、酒家に入りて、物くひ酒のみ、きようせしさまなり。ろか中三四人は、重役の者なりけん。外のものもいたくめいするさまなり、さてこの重役は、黑縮緬の羽織、綸子紋なとの縮緬の小袖、茶字の袴など、いづれも美麗の出立なり。賤士は木綿の縞の布子に、木綿小倉の袴なとを著て、いとかじけたる躰也。さて賤士三騎、王子の坂より飛鳥山に登る。細く嶮しき坂を、いと安く乘上りたるを見て、かの美服重役一人、酒興のまゝにつゞいて登りけるが、いまた坂半にもいたらぬほとより、主も馬も諸共にまろび落ぬ。幸にきずやつかさりけん。頭も顔も衣服も、泥まみれに成て立るさま、腹を捧て笑とも豈堪へけんや。されど貧士とても、慢まじき事なり。孔子も容貌を以て人を取るに公西赤に失すといひ、史記の諺に、相馬失之瘦、相士失之貧といへり。淸の趙綽骨相卑しといへとも、揚氏無比の忠臣なり。要離短小なりといへとも、慢るべからず。老練の大澤主水、未熟の木下藤吉郎に負たりき。細川頼之か遁世者の敬因近藤盛政入道を登用して、義滿將軍の師友とせしは稱擧すべし。

○虚言可愼

同上

宗五大草紙に、弓箭取人は約といふ事の堅く侍るへきと言承り候ひしと見ゆ、北條早雲廿一ヶ條に、上下萬民に對し、一言半句にても虚言を申すべからす。かりそめにも、ありのまゝたるべし。ことどとつくれは、くせになりてせらるゝ也。人にやがて見かぎらるべし。人に糺され申ては、一期の耻と心得へきなりとあり。卑賤若輩のそらごとには、抵かるゝ者少し、貴重老成人のそらごとは、道理を考てつくり出るゆゑ、根本固くして遂には國家をあやまつこと有べし。學者の虚言は千歳に傳へて、後世をあやまつこと多し。潮音か先代舊事大成經、多田義俊、澤田源内、などか著書の類なり。明君享保録に、人は珍らしき咄を申すども、うたがましき實をぞ語るべからず、と仰せられし事見ゆ。况や、實らしき虚言をいふへけんや。商賈は僞言を種として利得を貪るを常とする業なれど、士農工商と次第して、一の賤業とす。されど高貴の御前などに召さるべき者ならぬを、富商金銀の勢を以て、諸侯、大夫、藩士を輕視し、顯要の官人をも、行貨、貸金などの德を以て、自由自在に取扱は嘆くべきことわざなり。

表記に曰く、口に惠ありて、實至らざれど、怨菑ろの身に及ぶ。口のみを以て人を譽ざれど、民忠を作す。故に君子人の寒を問ふ時は、これに衣、人の飢を問ふ時は、これに介食、人の善惡を稱する時は、これに爵を授く。俗にいはゆる海道湯漬は、人にさげすまれもし、怨れもするわざなれど、愼むべし。本多佐州は生涯僞をいはぬ

人ゆゑ、當時の人佐州の一言をもて信を取り、調儀違ざりしとなり。薩州より浮田を出せしも、佐州の言を信じてのわざなりといへり。今川の家に僞をいはぬ士あり、死に臨でいうやう、われ生涯僞をいはざるは、事あらん時、國の爲に大うろをつかんとて愼みたりしが、さる大事もなかりしかど、今は僞をいはず、愼の志を立とはして死ぬるなりといひけるとぞ。孔明謹愼を以て人に許されしゆゑ、琴を彈して敵を去りぞけ、死して仲達を走らしめけり。神祖は御生涯御辭の違はせ賜ひし事なく、信義をもて泰平の基を開きたまへりとなん。これらの事ども、退肆にくはしく志るしたれど、閲してろの事實を知るべし。

○三夫の言

縱者三人あれど、賢人も無實の罪を蒙るよしは、馬援の傳に見ゆ、曾參の同名の者人を殺せしをり、母に曾參人を殺せしと告るものあり、母これを聞て、吾兒妄に人を殺す者にあらず、傳聞の誤なるべしとてうけがはず。又一人來りて告るに、なほれなじくいらへて自若たり。又一人來て告ぐるに、さては曾參の過せりと信じて立走りたることあり。龐共魏の太子とゝもに。趙の質として邯鄲に在り、還て後讒者の爲に、魏の惠王の疑を受く。この時龐共魏王に說て曰く、一人ありて市に虎ありといはゞ、王信とせんか。王の曰く否。二人言はゞ信とせんか。王の曰く否。三人言はゞ信とせんか。王の曰く信とすべし。龐共曰く、ろれ市に虎なきことは明也、然れども三人いへど虎

ありと信ず。邯鄲魏を去ること市より遠く、臣を謗る者も三人に過ぐ。これによりて實否を察し賜へといひたるにて、魏王の心解たる事あり。三人の虚言すら信せらる。朋黨の詞をそろへていはんには、いかなる聖賢の君も欺れざることあらんや。恩移り、愛易るは、讒の其間を隔るにあり、忠臣といへとも、これを君に移すこと能はず。孝子といへども、これを父に變すること能はず。周語の諺に、衆心城を爲し、衆口金を鑠かしと見ゑ、戰國策、漢書などにも出たる詞にて、げに衆人口を同うして、非を理にも、理を非にも、いひ成す時は、堅硬の金も消鑠へく、聖賢の心も惑ぬべし。

さみだれの頃、つれ〴〵にたへかねて、ふるき反古ども取出て、見もてゆくに、いかなる人が書置たりけむ。歌もめでたく、添書も又心ありげなれど、うつしとりて貴社におくる。

竹園女史

青柳のなびく姿をすがたにて
をれぬ心をこゝろともかな

こは我若きをりに、師の君の書て、あたへられし歌なり。其折は何の心もなくて、打をさめ置たりしを、年へて後取出で見るに、思ひあたる事ぞ多かる。誠に女子は心淺々しければ、思ふ事色に出やすきものなり。されど其振舞なよやかに、言はづかひ打志づまりて、品高う見ゆるは、其心いとよわくて、事ある時にのぞみては、あはてまどひて、ものゝ用に立がたし。其心雄々しく、學びの道にも、たど〳〵しからず。

才秀たるは其行ひあら〳〵しくて、裁縫の業をはじめ、家内のこまやかなる事をなし得るもの稀なり。されど、いづれをも取がたし。あはれ此歌の心をこゝろとせむには、女の道ふみ行しをりともなりなむかし。

國旗

横井知萬多

國はといへど神國、君はといへど日神の御裔、名は日の本にして、地は旭日のたゞさす處、四方にかゞやく國光、旭日ののぼるが如き國勢、あはれわが國の御旗のしるしに、日の丸を撰ばれしことは、ふさはしともふさはしきことならずや。

猿のなり〳〵て人となれりといふ國、賊のなりあがりて君となれりといふ國は、それにかなひたる名おほせ、夕日の日かくるかたに位す、星なす國光は、今や曉におひたらむが如く、夕日なす國勢は、今や山の端におちて影やう〳〵うすからむとするが如きにむかへり。

あはれわが日の本の國民にして此みしるしをあふがぬ人やあるべき、否、外つ國々におほひわたりて世界にこのみ光を尊まぬ人やあるべき。

されど世には風雲の變なきにしもあらず、あはれさむかり缺くることなく、みちたらひたる御しるしを、かりそめにも風雲のためにくもらしむることのありなむには、わが邦人の罪科ぞかし、夢なわすれぞよその風と雲と。

堀切の菖蒲

ちわき

潮來でじまのごとく、眞菰のなかにれひたつならねど、五月雨に池の水こゑしとて、いづれあやめと、引きわづらふべくもあらず。水は、ただ、堀池にたゞふるのみにて、八橋のわたせるもなれど、見て、蜘蛛手に物おもひし、はるゞきぬる旅



をしのびて、かれいひ、ほとびかすまでもなし。されど、ゆきゝのたよりわしからで、塵のちまたにさかりたるなむ、まことに、雅人が心やりのたねなる。あはれ、には鳥の葛飾、堀切の菖蒲は、人のこれを引くにあらずして、これか、人心をひくべきになむ。

この里はみやこぢ近くちりとほし
　ましてあやめの花のさくなる

れ伽ばなし（二）

須賀の屋主人

鳶のはなし

鳶は不孝の鳥にて、親、東へゆけといへど、西をさし、南といへど、北をむくなど、よろづ、れのが心のまゝにふるまひて、親のことゞを、もどきさかひければ、親、死なむとするをり、れのが屍を、山にうづめさせまくほりしかど、日ごろの、子らがさかしらを思ひて、海にはうむれ、といひ遺して死にき。鳶の子ら、なげき悲しび、こゝに、はじめて、前のあやまりをさとり、不孝のつみを悔いて、親の遺言をまほにまもり、屍を海中の巖にうづめ、塚を、ろの上にきづきたり。されどころ、雨ふるごとに、海の水かさまして、親の塚のながれむをれろれて、ひより〳〵と鳴くなりけれ。あはれ、木ゑづかならむとするも、風やまず。かう〳〵のゑたき折には親なし。人の子たち、よく、この道理をわきまへて、親のなきのちに、鳶の子らがごとき悔を、なゑたまひそ。

奈良菊

いつの頃なりけむ。そらみつ大和の國、櫻井の驛のをさが家に、奈良菊となむよべるをさめありける。いづれの誰が子といふことをしらず。をさの家のこらが言ばによれば、さきつ年、をさの家の女房たち、うま祭見むとて、奈良まうでするこありしに、をりしも、霜月の廿七日なれば、空さえて北風さむきに、をり／＼雪さへふりまじりて、膚もきるばかりなるに、二月堂のあたりに、破れたる衣ひとつを身にまとひて、しゞかめるめの童あり。女房たち、たちよりて見るに、いとやつれて、手足はひゞきれ、面は垢にうづみて、まくろきこと、いはん方なし。されど、何となう、あいきやうづきたるところあり。あはれがりて、いづこのものにて、いかにせしぞと問ふに、答へではろ／＼と泣く。名をとへば、菊といふ。あたりの人にとへば、いづれの子ともしらず。されど、かへる家あるべうも見えざれば、かなしのものよとて、ゐてかへり、しもべにませて、めし使ふ。ひとびと、奈良菊とよべり。奈良よりゐてきしなればなり。

奈良菊やう／＼およずきて、花の蕾のほころぶころとなれば、あいぎやうづきたる面の、いよゝ黒ずみゆくのみにて、才も情も、さらにすゝまず。ただ、いつまでも、をさな兒のやうにて、慾といふものなし。つねの言ばに、石の鳥居ほどの飴だにあらば、われは、この世を臥して暮さむといひて、歌ひける、

おもふこと心にまかすものならば
　多武のとりゐをあめになしてむ

ある日、ふと、奈良嶺のすがたの見えずなりしを、たれしも、心にもとめでありしに、二日みかをすぎて、なほ見えざれば、人々はじめておどろきて、手をわきて尋ねけるに、小屋のすみの、藁つみかさねたる上に、のどかにふせり。あたりには、竹の皮ところせく散りしひぬ。よびおこして、いかにせしぞと問へば、われ、日ごろ、起きてたちはたらくことを、わづらはしく思ひけるに、このほど、そこばくの財えたれば、そをことごとくに、物あきなふ家にあたへて、日毎に、もちひ、あめ、このみ、など好むものをとりきたりて食ひ、かくは臥してあるなりけり。われ、かくて命をはらむ足れりといふに、人々、あきれ、かつ、けうがり、腹をかゝへてくつがへりたり。（未完）

可憐孃

中尾鶯夢

（一）旅路の好奇心

ねむの花凋み萎れて、暑苦しき蟬の音も弱り果て、翠碧色濃き樹々の梢の、諸葉いきりたる頃、日にたびたびの打水忽ち乾きて、眞砂の照り燒かれたるに、わけて塵埃の絶え間なく颺揚り撒捲ける、都の巷住居などか怺へらるべき、假令聚簾幽邃しく垂れ　葭戸飾るとも、怨めしき盛夏の日足、わざとらしく遊けれど、神疲れ心惱み　書讀む務の、物憂くて、なぞか爲るべき、まいて操觚の業の、

神經を劇しく使ひ、腦を痛むる事にしあれど、人をも蒸殺さんず暑氣の、睡魔を誘かして襲はしむるに、瞼重く魂銷びて、束の間も耐ね難き、取越苦勞に似たれど、今よりすら頭痛の種となりたるわれ、轉ばぬ前の杖なる善き籌策もがなと、徒然の間に〳〵思ひ煩ふたりしが、不圖心に浮びたるは、並樹の松の緑翠滴らん計りなるに、清く涼しき風の吹通ふ下陰、女波男波の寄せては返し、優しく岩根を洗ふ磯邊などの、逍遥漫歩、あるは蚊遣火の烟縷縷く夕顔棚近き田舍家、廣々として風通好き寺院の閑室、などを借り受け、假の庵結びつ、避暑の眞味を試すべきころ、こよなう樂しく嬉しき限みなんめれ、との事なりける、かく心動き氣振ひては、矢も楯もたまらざるに、怖ろしき惡病の、人の命を奪ひ拿りたる噂、ちらはらと耳に觸るゝ儘、穩き心も無く、ひと日指す方も定めで、都の空を迷ひ出でぬ、たゞ古びたれど破れざる菅笠に、砂礫も焦溶けん日光を避け、細けれど強き藜の杖に、汗と埃に浸塗れて、疲弛き足をたすけつゝ。

やがて砲臺の縹渺たる天涯、遠霞の裡に隱見なし、白帆搖ぎて鷗群立つ、品川の沖を、殘惜く見過し、老嫗少女の裳裾褰げ襷綾どりつ、海藻小筐に拾ひため、折々頭を包める手拭把りて、緑爲す鬢面海風に吹き曝す等、得も見難き大森の里に、俗腸を洗滌したる時、遙に後方より般々たる雷聲を追蹤つゝ、蜈蚣の蜿蜒匍匐ひながら、片雲に均しき黑烟吐きつゝ馳るが如き、滊車の笛の響を聾か

すに、折ころ好けれど、乗移りて、機關の震動に搖られながら、眠氣を恣にし、夢に寤に、いつか逗子の里へ着きにけん、人々の囂しく罵り合ふ聲に、驚き眼醒め、蒼惶車を降りて、旅舍を求めたりき、いまだ日の漸く廂に、影を運びかけし頃なりしかど。

忙はしき入浴に、晝間の汗と勞を洗滌しつ、新らしき浴衣着換られど、肌潔く爽快言はん方なし、椽側に立出て欄干に肱凭せて、他愛なく、珍らしき田舍の風光に恍惚れしが、怪しき叢雲の茜を沒す程もあらせず、涼しき風に誘はれ、夕立一しきり降注ぎぬ、急ぎ手を拍鳴して、下婢呼び近づけ、夕餉の膳をと言へど、燋け黑みたる顔に愛嬌の微笑を含み、お銚子はと問ふ、平素ならどわれの謹愼深き、一言の下にはねつくるなれど、この明媚絶佳の景に、それ無くてやは、少し給はれと請ふに、謎にては無けれど不似合に高尙き此の言葉、讀めしか否やは知れねど、無作法なる嘲笑を殘して、はや梯子段を降る音幽かに聞ゆ。

暫時下女を相手の閑酌に、顔は淡然紅を潮しけん、熱り來り勃として、興味津々湧き起りにけれど、飄然閾を跨ぎ出でぬ。

文部省撿定試驗の問題を見て、とりあへずかき試みたり。草々の筆のすさび、誤のみ多からんを、幸に敎を賜へかし。

なほ敎育、歴史も、つぎ／＼に出さんを、これもれなじくなむ。

廿八年六月　師岡須賀子

國語解釋

第一問 清少納言の著し　枕草紙の「風は」といふ文中にあり
春曙抄其他註釋書多かれどかゝす

第二問 阿佛尼の著　十六日夜日記の中の文なり
阿佛（四條又は北林禪尼といふ）の鎌倉月影谷の宿より都の姉君（中院中將のうへとも三位入道ともいふ）へ我子爲相爲守などの事頼めるなり
殘月抄其他多かれはこれも略きつ

第三問 鈴屋集中述懐の文なり本居宣長の著なり
これもはぶく

(ろ)さうぐゝし　淋々しの意にて物足らぬ程のことなり　「候らはずと云へども淋々しからせ給ふ」「よき歌など出づる樣もあれさうぐゝしや」などあり

ゆふけ　夕占　「夕トにも占にも告れる今宵に」「月夜には門に出立夕占とひ」

ゆふげ　夕飯なり晩餐

ろどくし　稜なり圭角ありて馴れ親まざる意　「又此宮とも御中ろどくし」「さらぬだにろどくしうもてなし」

わくらはに　たまさかに邂逅　「わくらはに訪はれし事も昔にて」

らうたし　愛らし可憐なとの意　「らうたきものに思はし」「らうたくなつかしき」

らうがはし　亂りかはし　「らうかはしき大路に立おはしまして」

さくじる　小賢しく出過ぎたる意　「いとさくじりたるよすけたる」

みつはくむ　稚歯萌　年老て再稚々しき歯の生ずるなり又水は汲むにかけて言ふときもあり

む「白河のみつはくむまで老にける哉」みつはくむまで仕みはへるなり

法氣付なり　佛染むるといはんかとし「吉祥天女を思ひかけんとすれは法氣つき」

ほうけつく

第四問　軍人に賜はりし勅語の中の二節なり

(い)我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ處にぞある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵どもを率ゐ中國のまつろはぬものどもを討ち平け給ひしより二千五百有餘年を歴ぬ此間世の樣の移りかはるに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき

(ろ)朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を經すして海內一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖宗の專ら蒼生を憐みたまひし御遺澤なりといへども併し我臣民の其心に順逆の理をわきまへ大義の重きを知れるが故にこそあれ

國語　設問

第一　動詞自他の辨

自動詞とは自の動作形狀を言ひあらはす詞をいふ

他動詞とは他のものにかゝりて動作形狀をいひあらはすをいふ例へば進む、開くの動詞ならば

進	ま	み	む	む	め	自動詞
	め	め	む	むる	むれ	他動詞の如
開	け	け	く	くる	くれ	自動詞し
	か	き	く	く	け	他動詞

委しきは文法書あれどはぶく

第　二　テニヲハの定義をあたへ其分類を示せテニヲハとは體言用言語などの間にありて上下の關係をあらはす短きことゞをいふこを分類すれば

不然詞　感歎詞　希求詞　命令詞　禁止詞
疑　詞　想像詞　決定詞　反動詞　抑揚詞
接續詞　述　詞　强　詞　雜　詞　等なり

第三問　維新以前の有名なる國語學者三名を擧げてその略傳と學說の一班をしめせ

僧　契沖　加茂眞淵　本居宣長　なり

契沖は攝津尼が崎の人なり幼より出家して兩部大阿闍梨となる佛書經書は勿論國史律令古記錄物語文等を見て中世以降文法語格の漸く亂れたるを歎き一々古言古書に徵して其誤を正し和字正鑑抄等をあらはして後進をして向ふ所を知らしめたり水戸義公の嘱によりて萬葉集に註せり圓珠庵と稱し高津に住み元祿の末世を終はりぬ

加茂眞淵は岡部氏縣居大人ともいへり遠江の人なり荷田春滿の門に入りて出藍の稱あり古言古語を硏究すること契沖の上に出て且儒學の說を排して國學の振張をはかり和歌和文をして奈良平安時代の古風の正しきに則らしめたる是專其功なりけり是れより世人いよ〳〵我國言語の重し尊ぶべきことをしり今日の隆盛を見るに至れるなり明和年間七十三にて卒しぬ

本居宣長は伊勢人醫を業としたり眞淵の學風をしたひて之に學ぶ蓋眞淵は歌文をもはら究め宣長は國史をも兼攻し其該博

なる事眞淵をも凌駕せり古事記傳玉かつま直日靈玉鉾百首詞の玉の緒、玉あられ其他皆古人未發の説多く後世尊皇の大義を知り國學の隆盛を見たる其功の著きものたり享和九年卒しぬ七十二歳なりきと云ふ

第四問 平安室町江戸各時代文學の特質を略叙せよ

平安朝の文學奈良朝以來の大學國學の外に弘文院、勸學院、淳和院、奬學院、學館院、綜藝種智院等の和學ありて文章生文章博士なともありしか藤原氏の專擅後漸く衰へ行きぬこの頃より漢文の外に和文やう／＼起りて閨秀才媛等は其秀を極めたれは女文學とて斥けし者も之を學ひて終には漢文をさへ淩くはかりになりぬ後には戰記文とて和漢混淆の一種の文体となりぬるも世のうつりかはるさまなるへし詩歌、書書は尤此時代の特有とするところなりけむ

室町時代は南北朝以來の戰亂の余波をうけて人々文學をかへり見るに暇なく唯五山の僧のみ修むるものゝ如になりて學校はなく勅撰集は絶ゑ文學として專攻するもの極めてすくなし和漢文各其体を變し後世則るへきもの殆少し文學極衰の世ともいふへからん

徳川氏治世の文學は其初家康前世に鑑みて文學を奬勵してより鴻儒碩學輩出し和漢文學も盛に幷ひ行はれ興讓館、時習館、造士館、徴曲館等の諸藩の學校あり 聖堂には春秋に釋典あり後には蘭學より英

佛獨魯各國の學盛にして文學界愈繁劇を極め從て平民文學も又之に伴はれて起り明年の新文學を作るに至れるなり要するに平安時代は文學尤上流にのみ行はれしかは優美莊重なりしか室町をへて德川時代に至りては漸々中流以下にも及はし明治文學の基をなすに至れるものならんか

國語教授法問題

第一問　作文の採點は如何なる標準に據るへきか

(一)級の上下と年齡との比較
(二)讀方科其他の聯絡の如何
(三)問題の難易
(四)旨意の適否
(五)誤字誤格の有無
(六)着眼の優劣
(七)全數當時に於ける成蹟の如何

大方は右の內を斟酌せは誤りなからんか詳くは別に云ふ處あるへし機變の策は作文教授上必要なるものなるへし

第二問　讀方教授の方法及其目的

讀方教授の方法は近來教育學心理學なと盛になりてより小學兒童に於ける發音法講讀法等整々として間然する處なきか如くなれと中學以上の讀方に於てはなは舊來の注入主義を專用するものなしとせす且その目的に至りても茫々たるものありかくてはいかてか渺々たる讀方海其目的とする羅針盤なくして彼岸に達するをねむ左に記するもまたその一斑なるのみ

方法

讀方教授は先つ讀書を初しむる前に其一篇の主眼とする處文線首尾等を談話問答して大意をしらしめ其大方了解するを見

て後其雅言難句故事等を塗板等に書し又は特更に注意解釋し後教師まつよむかまた若したやすきところならは生徒をして讀ましむるも宜しからむ生徒をして讀ましむる場合には發音句讀等を傍より匡正する樣注意せしむへし

講義も教師の專とせすして時々生徒をして先講せしめて後其否を正すもまた一法なるへし

一篇の主眼、文線、首尾、照應、詩、歌故事等は一層注意し看過せさるを要す

又文法は讀方と分ちて教授すとも生徒の常に誤り易き語悟り難き格等の見當りたる時は讀方中に於て直に教授するをよしとすこれ讀方と文法とを箇々に離散せすして注意力を強むれはなり

又文法と箇々別々にせされは讀方趣味を以て文法をも嫌忌せす習得すれはなり從前授けたる課も成るへく聯合して記憶力を強固にせんこと必要なり

目的

讀方教授の目的は大約左のことし

(い)一切の文學教育の基礎
(ろ)文章は言語の反映なること
(は)國文國語の他に及ほす勢力
(に)著者の精神　一篇の主眼
(ほ)文法語格の應用
(へ)他學科との聯絡

第三問

讀書科と作文科とは何如して聯結せしむべきか

讀書は作文を講讀して一切の文學教育の基礎を得るものなりされは讀書科と作文とはもと全一のものより成りなるものに



て讀書の力なけれど作文の力を得る事能はず作文の力を得ずしては讀書の眼精確ならん事難し故に讀書と作文とは車の兩輪、人の唇齒に於けるが如く兩々相待ちて後其功を奏すべきものとす例へば讀書科にて忠孝といへる題にて平重盛の記事ありたらんかさらば其折に於は忠と孝との大義は勿論皇室の御有樣淸盛の擧動重盛の風姿心事諸將士の意向等惱裏に印象して一の概念を生したるべしさらば直に敎師は各自の概念を消滅せざるうちに仝題若しくは是と仝一の事蹟ある文題を與へ課すべし多數の生徒ならんには各自に問答して其概念を喚起せしめ之を綜合して思想の概括をはかる時は其功も少なからざるべし

又讀書科に於て花見の記を授けたらんには仝じく花見とせずして觀月紀行等の文を課するも又可ならんか

要するに讀書科にて得たる觀念を作文科に於て愈精確ならしめ之が思想の開發をはかる事造次も忘る可らざる處なるべし

花ふゞき

鹽井雨江

ろの十八

百萬の東夷が、一寄せに寄せ來りて、打てど採めど、更に動く氣色なく、金剛の城守り固めたる楠が一心故に、辛うじて繫ぎ止めたる宮方の武運も、又再び開けゆく世となり、此處彼處に、勇ましき勤王の旗風は、野を靡かし、山を動かし、六波羅の兵馬も、遂に微塵となり、剛かりし虎狼も、右往左往、京は再び天日の下、王民の城となりたるめでたさ、いはゝぬ民草もなかるらむ。

御息所と賤機とは、彼の夜さりよりして、三郎が館に迎へられ、妻なる者はじめ、老が家族どもの、柔しくまめやかなるかしづきに、うち慰められ、雨に風に火に水に、よく〳〵つらかりける旅ねの疲れなど痛はりつゝ、三郎の妻がすゝむるまゝ、都の便りを待ちたるが、主上も既に都へ御入りあらせられ、一の宮も恙ましまさず、三郎は薄手負ひたれど、障りなくおん供まゐらせたりとの報知ありければ、三郎の妻のよろこびいふばかりもあらず、急ぎて、斯くと賤機に告げ、御息所に啓すれど、おん悦は今更に云ふまでもあらず。賤機は、殊更に物もいはず、御息所のおん膝を抱きかゝへて、唯悦びの涙に、霎時は前後も不覺。君の爲めには、あくまで勇める烈女が、さてもさすがに少女心のあどけなさの見えてあはれや。

これより、疾く御身の上を報らせ奉り、都のおん





迎へのまゐらむ日を待ち給へと、三郎が妻の歎むるを、賤機は、一刻の間も、かくてはもどかしく覺ゆれど、いなとよ、都の戰も定まり、主上も既に御入りあらせられしとあれど、都までへは最早事も侍らじ。武文は侍らずなりたれど、七郎殿のおはすあり。さまでに心遣ひし給ふにも及びじ。願ふは、おん身がはからひにて、彼方へ渡らむ舟の便りを與へ給へといへど、御息所も、彼方のみとかく急がるれば、と、言葉を添へ給ふ。御心の中を推しまゐらせば、三郎が妻も、再びとは返さず。さらば御舟は直に仕立まゐらせむ。せめて、郎黨の御伴ばかりを許させ給へ。上ばかり上らせ奉れしとあらば、夫がきかむ日、必ずや送りもまゐらせず、至らぬ者と恨み候はむも、心苦しければ、

曲げて許させ給へと、乞ふ所も、げに道理なれば、そはなに〳〵の事ながら、さても返す〳〵忝なき情に預る事の嬉しさよ。宮にも啓させば、さこそ悦びおぼすらめと、有り難き姫の言葉。あな勿体なき仰や。みるめなぎさの海士少女、刈りにも夢にも、仰ぎ難き御光りを、現ながら、かう親しく仰ぎ奉りにし此の身は、いかなる果報の末なりけむ。祖に告げ、子に傳へ、身の榮、家の榮、この世の限りに候と、かしこまりて申す三郎が妻の手を取りて、賤機は、また、母さまのやう覺えて、別れとも無しと、一言の外は、落涙二度三度。領主の差圖なれば、御船は、その日の中に整ひぬ。なほ一日は名殘りを惜しみ給ひて、六月の末つ方、草も木も露に沾ひて、心地よげなる曉ばかり、い

ざとて御船に召し給へど、そよ〳〵吹きそめたる朝風は、勇ましげに眞帆をやり、なほ曉の夢さめぬか、眠るが如き海原は、船の行くまゝに、妨げも立ち騷ぎもせねど、船手は靜なれどいとはやく、いつしかに後なる磯邊は、唯雲のやうになり、更に又霞のやうになり、遂には、波より外には見えずなりぬ。

順風平波、思ひのまゝに、御船は走りて、日數も經ず、尼ケ崎の泊りにはてたり。御息所は、さまざまの船路に逢ひ給ひしものから、かゝる穩かなる海には、いさゝかなるれん煩ひもなけれど、皆悦びきこえて、有井の郎黨一人のみ、さるべき旅館を求めむと、急ぎて先にうち立ち、賤機と七郎とは、御息所を助け奉りて、靜に磯邊たどりけるが、松風水色そゞろに心に浮ぶ舊時の感や多からむ、賤機は何となう勇まず、遲れ勝ちなるを見給ふにも、御息所のみ心には、一入あはれを添へ給ふらむ、やゝ遲れたる賤機の手を取り給ひて、ことわりぞ、賤機。なれはさこそ父の思ひ出られて、悲しからめ。親らも悲しきぞ。なつかしきぞ、武文が事の。いとほしきぞ、汝が上の。さりながら、のう賤機、やくなき主に仕へたる身の不運と、何事もあきらめくれよ、恨みてな呉れぞ賤機と、仰せ給ふを、賤機は、とみにうち消して、あな何をかの給ふ。父が悲し、君が怨み、いかでさる心を、賤機が。勿体なき言仰せたまふな。君が爲めに果てたるは、武文が本望。武士なる武文の身の榮譽。それ悲しうて、賤機が何とせむ。それ怨めしうて、

武士の子が何かせむ。くやしき事なの給ひそ。ややうなきものな思ひ給ひぞ。妾が遅れまゐらせしは、美しげなる貝あるに見とれて侍るのみ。見そなはせ、此處にも、面白き樣したる貝も侍るに候はずやとた〻ずみて、うち拾ひ、ほ〻と笑ひにまぎらす心根、いたはしの限りや。

あな賤機、貝などの何の面白き事かある。汝れは、櫻に物思はせじとて、さる方に紛らすならむ、心の中が思へど猶更にいとほし。吾は、賤機、そちがいとほしきぞ。賤機や、櫻は武文の事の悲しきぞ。親らが爲めに果てし武士と思へど、武士の武文がいとほしきぞ。やよ賤機、武文が果てたるわたりは何處ぞ。彼方の岩か、此方の峯か、汝れは臨終にあひたりといへど、知りつらむ。覺えてならむ。親らはそれさへ知らで悲しきぞ。せめて其岩なりと見まほし。其の跡なりと知らまほし。親らに告げよ敎へよ、賤機と、わりなくせめ給ふ。

父武文が、無念に沈みて、あへなくなりたる尼ヶ崎の浦迴、賤機が眼には、岩となく、松となく、滿目唯父の影のさまよふがごと覺ゆれど、心には父上とよび、ものいふてとよび、幾度か空しく取りすがらむばかりに覺ゆれど、唯御息所によしなき嘆き見せじと思ふ一念の固けれど、心も亂れず狂ひもせず。玄かと御息所に引き供すとすれど、何處となく、賤機〳〵と父の呼び給ふ聲のきこゆるやう覺ゆるに、何となく歩みとゞめられ、遅れがちになつたるほどなれど、ありつる巖は變りもせず、波は昔のまゝによせかへすを、詠めては、さすがに

怺へむやうもあらず。父武文が無念をとゞめたる巖に取りすがりて、父上よとておぼえず前後不覺。

文林

螢　高崎 正風

空たかくあがれる人のあふくかな
　　ひかりは同じほたるなれとも

一月五十首よめる歌の内

鵜舟術　諏訪 忠元

いかでかりあゆかとるらん長柄川
　　鵜舟のかゞりかすまさりゆく

夏眺望

ながめやる夏野の草に風ふけむ
　　みどりのなみぞうちよせにける

薄暮山

薄すみの繪にこそにたれ夕まぐれ
　　空にそひえて みゆる とほやま

閑居竹

住人のこゝろにならふなよ竹は
　　しのび〱にそよくれとする

岡樵

幾年をかさねきつらんしらかしの
　　みどりしけれるをか越のみち

夕山風

夕日かけかたふきしより山風の
　　音もたかくぞなりまさりける

螢　小出 粲

爭ひてうつやうなゐかともよりも
　はたるのかずぞ少なかりける

雨後螢　　遠山　英一

わめやみてくもまた低き夕やみの
　空をたかくもとふはたるかな

郭公　　三輪　義方

ほとゝぎすたゞ一聲をきゝしより
　おなじ木陰にたゝぬ日ろなき

河上郭公　　草野　隆道

ほとゝぎすこよひも加茂の河上に
　なくなる聲はかみぞきくらん

夏庭　　仝

志ら雪のふるこゝちしてうの花の
　ちりしく庭ぞすゞしかりける

甍に入々と佐藤大佐へ送りたる　　草野　隆道

たぐひなき君かこゝろの太刀風に
　たいへい山やうこきそめけむ

小宰相　　佐々　豊水

着長とともに志づめどひめかがみ
　なみ〳〵ならぬ影ぞかがやく

備前少將光政の夫人　　仝

をしへ草つみろろへたることとのはの
　花のにほひのかぐはしきかな

美人撲螢　　勝家　貞良

少女子かまねく袂のうへにれつと
　見せて高くも飛ぶほたるかな

登中山　　蜂須賀隨子

不二のねをたびの栞と見つれとも
曇らはけふもかひなからまし

竹風　松平　健子

立のひしたけのまき葉の露ちりて
すゞしくかよふ窓のゆふかせ

窓前螢　諏訪　晴子

文學ぶ窓の小さゝの葉がくれに
すゞしさ見せてとぶはたるかな

鵜川　仝

みしか夜のあけぬろのまと大井川
やみにう舟の數まさりゆく

舟納涼　仝

隅田川すみたる水に舟とめて
おふも涼し夏のゆふぐれ

夏草　諏訪　晴子

夏野のに生しけりたるもゝ草に
旅ゆく人のみちやまとへる

夏夜　仝

かやり火の烟もはひとならぬまに
空もしらみて夜はあけにけり

文月　仝

棚機にちかつきにけん大空の
くもりかちなるふみ月の頃

水雞何方　稅所　敦子

いつこともきゝわかぬまに明方の
水雞のこゑはやみにけるかな

去年の暮母君のみまかりたまひしをり　高崎　松子

母きみのめしたおめしを見る毎に
　思ひ出されてかなりかりけり

山中雲　　　　遠山いね子

柴人にをしへられつるやまみちも
　ふみまよふまて雲ぞかゝれる

雨請　　　　河野文子

祈りつる驗しも見へてあら小田に
　わふるゝばかり雨そゝぐなり

智徳體三育につきて

丹羽ちやう子

鼎はみつの足ありて、各長さひとしく、ふとさもまたおなじとて、ならびさへほどよけれど、すわりよく、身のあまる重きを負ふも、これに堪へ、物の突きあたりぬるにも、大かたは、たふれかたぶかんうれひなし。さるに、もし三つの足の内、いづれか一つ、みじかゝりなんには、忽ちにまろびくつがへりて、またき用をも、爲し得ざるべし。げに、いにしへより、鼎立といふ文字をば、極めて大事なる處に、もちゐしも、ゆゑあることになん。人の智徳体三育に於ける、またおなじ。三育ともにそなはりて、過不及なく、均齊統一してこそ、完全の教育とはいふべけれ。そもそも、体育の目的は、人をして、身体の成長と、強壯とを得しむにあり。人の福祿の源は、みなこの目的を達するによりてぞ起る。身、健かならざれど、道を明らめ、徳を高うせんとするも、よしなかるべし。智育の目的は、人をして、是非

善悪を、正しく辨別して、道をあやまらざらしむるに在り。人の子の世にありて、不忠不孝、もろもろの悪を行ひ、慾を恣にして身を亡し、家を失ふにいたるは、智慧に乏しく、道を明らめざるが故なり。徳育の目的は、人をして、義務本分を完ふし、生活を高尚ならしむるにあり。この高尚なる目的は、教育の成果といふべくして、智体兩育の必要なるは、全くこれがためのみ。さるを、世の人これをわすれて、徒に其方便なる、体智兩育にのみ、重きをおきて、正鵠をうしなへるこそ、いとも〳〵なげかはしけれ。

されど、三育いづれをいづれとかいはん。智なければ、徳達せず。身健かならざれば、鳥けだものに等しく、いかでか相鼠有皮のそしりを、まぬがれんや。共に長短なく、大小なく養ひて、鼎の足のやうにてこそ、はじめて、人の道をもつくし得べけれ。

あはれ、麟の子に麟あり。龍の子に龍あるは、自然の理りなれど、たよろ、父母としてわが子を育て、教師として人の子を教へんには、よくこの理りを、わきまへでやは。

綠陰讀書の記

勝家三篇

水無月の地さへ裂くるばかり照りはたゝく頃は、朝にものせしことも、夕には忘れはて、昨日のことども、日頃ふるにかと思ふばかり暮らしがたき日の暑さには、唯扇の風をのみ命なりけり。さ

ては萬の學生達も、皆暑中休暇とて、物學をやめて、遠き故郷へ歸るもあり。あるは、避暑とて、箱根、伊香保などへものして、おのがじゞさまざまの業して、日毎に樂しく遊び暮せり。おのれも、此頃この暇をえたれど、何れへかものせんと思ひ立ちぬれど、またつく〴〵と思ひかへせど、老が身ならむには、ともかくも、今を盛のものゝ、いかでかあたら月日を、徒に暑しとのみ遊び過すべき。この永き日を怠らず勵み學ばゞ、よしや短き才なりとも、少しはその道にも心得へからむやとふるひ起しぬ。されど、いぶせき住居は、いとむさくるしけれど、夏は木陰こそとて、朝まだきより、近きわたりの、茂りあひたる木立の下に席を占めて、文机などもちゆき、やがて向ひしに、緑したゝる若葉の露の涼しげなるが、梢を渡る風さへ見えて、いとなつかしく、おのづから心もおちつきて、心地よきは、所がらなりとぞ覺ゆる。かくて、例の文どもひもとき讀みもてゆくに、日頃見たりしわたりの、何心なく過ぎにし程々も思ひ知られて、おもしろきふしは、わきて面白く、をかしきは殊にをかしく、哀なるはそゞろに涙を催して、深き心ばへあるくだり〴〵も、おのづから容易く解きえられ、さながら古人のさし向ひたらむやうにてなむ。かくて、暑さもやう〳〵加はりゆきて、晝すぐる頃とはなりぬ。蟬の聲いとかしましく、樹陰さへむとくにものむづかしくなるまゝ、讀みゆく文字も歩み出して、ほのかに二重に見ゆる心地せしよりのちは、物もえ覺えざりけり。

さとつようふきれてせたる風に、文どものまひかはせる音に驚き目覺むれどいつとなく、山の端近う日影は傾きたり。さては夢のうき橋わたに渡りたりけむ。余所に見たらむ人のいかばかりをかしからんと、いと耻かしう、うしろめたくて、あはたゞしうとりかたづけて家に歸りぬ。實に物學びこそ怠り易くなりがちなるものなれ。古人の始終を誡めおきけむ言の葉も、今はおのが身の上となりて、いと口惜しや。すべて何事にまれ、始の程こそ隨分いそしみぬれ。また半にも至らぬ程に、はかなくよろになしたらむは、いとも〳〵いひがひなく口惜しきことなりや。されど、いかに日永く暇あらむも、才短きおのれらの身の、あたら時間を空しく過して、はかなき夢路に迷ひぬるなど、まことにあるまじきわざにこそ。さはいへ、過ぎ去りたることは、いかに思ふとも甲斐なし。さてはまた此後のいましめともなりなむとて、一言かくは記しおきつるにぞ。

螢狩の記

横井知萬多

いにしへ唐土の某が集め出で、學の窓をてらしてより、何となき虫なれどみやびたる人々にめではやさるゝは、螢なりけり。五月雨名殘なく晴れわたりて、心も自から曇りなくなりぬる夜頃、殊にらうたがらるる某の君の許をとひけれど、み娘の君、よくもとひ來つ、今より妹と、螢狩にゆかむとおもふを、いかで〳〵と誘はるゝまゝに、御供

つかへむとて出たつ。青葉の陰涼しきわたり、杜鵑のなきわたるも、折からめでたく、水雞さへ耳慣かすよ、妹の君のいたいけなる聲して、螢來々と打出で給ふには、心なき虫も誘はれ來ぬへく、物いひては逃げぬべきをと姉君のむづかり給ふもをかし、草の葉末の影をもとめて、こゝにゐつと急ぎ立よれど、なほおく露にうつれるなりけり、せきいれし小田の水影きよき小川の流に、水や空とも飛ぶさまのおもいはずをかしきには、とらむともせずてながめをり、やろ人の來るけはひに、俄にとびちがひて、晴れたる空に亂るゝは、流るゝ星の如くなるを、團扇さゝげてうちおとし、あるはにぐるをおひて、水の中を走りすさび、濡れたる裳裾かゝげてなほとゞまり給はぬも、所からいとをかしきを、うすものにあまたつゝみてよろこび給ふ二人の君の面は、さやかに見えて艶になまめかしさなといはむかたなし。少時ありて、東の空明らかに月さしのぼれど、虫の影漸うすれゆくに、今はせむなしと立歸りて、昔の某のたぐひならねど、文照してよみ給ひつゝ、うべこの光ならず、たやすくよまるゝよと、きらきらしき燈火わざとかいたちて、あはれ四時折々につけて鳥虫のおもしろきは千々にあれど、夏はこの虫、げに杜鵑も水雞も、この光あるべきかはと、よろこび給ふもいとめづらしうてなむ。

○五月六日數詠歌の中

鈴木弘恭先生撰

秀逸

春草短　水野忠敬

菅の根のながき春日になりぬれさ
　もゆる小草さはみしかかりける

山家秋深

落くりをひろふうなゐにあひにけり
　あきもふけゆく山かけのいほ
増山三雪子

冬夜長

閨のうちにかきおこしたる埋火の
　ゆきさなりてもあけぬふゆの夜
江刺久恒

暮残花

鶯の聲するかたにたつれはや
　若葉かくれの花もこそあれ
仝

野風

かたよりに草葉のなびく野へみれは
　風のゆくへもしられぬるかな
河合喜三子

川霧

いかたしの聲は聞ねて川面の
　霧猶くらきあさほらけかな
仝

鷄告曉

曉に夜はなりぬらんうちはふき
　ひなおさろかすかけの聲する

酒　諏訪晴子

さゝの葉のつゆもみたさす候しみて
　のむへきものは酒にそありける

暮春蛙　諏訪忠元

春のはやくれてかへらぬやま水に
　こゑをつくしてなくかはつかな

隣家衣擣　仝

聞なれしさなりのきぬた中〳〵に
　うたぬゆふへそさびしかりける

薄暮山　仝

薄墨の繪にこそにたれ夕くれ
　そらにそひねて見ゆる遠山

雜報

●皇后陛下行啓の紀事　皇后宮の御めぐみ、深くましまして、御かげを蒙らぬ民もなけれど、先頃廣島の豫備病院に行啓わらせ給ひし、ときのことどもを承れど、なほさら、いとかしこうてなん。

明治二十八年三月十七日
皇后陛下、東京御發輿、廣島陸軍豫備病院入院の患者御慰撫の爲行啓、同十九日御着輿あらせられ、直ちに香川皇后宮太夫をして、翌日にも病院へ行啓在らせらる可き旨仰出されしも、皇后陛下は御不例後、殊に數日間汽車に召され御勞あらせられし折柄なれば、一兩日は是非共御休養遊ばさせられ度旨、達て申上げし故。遂に同二十二日より、隔日に各病院を巡らせ給ふことに仰出されたり。

廿二日には御豫定の如く、廣島陸軍豫備病院本院へ行啓在らせられ、樓上に於て兒玉陸軍次官、次に忠悳、次に鍋島廣島縣知事、土屋留守第五師團長、佐藤軍醫總監を首め、病院の職員たる奏任官に拜謁仰付けられ、殊に忠悳には

昨年出兵以來全軍衛生上の經畫に心を盡せしを嘉ぶ尙益々盡力せよ

との御詞を賜はりし故。忠悳は是れ全く陸軍衛生部一致協力の致す所にして、謹みて本日の龍榮を全部員に拜承せしむべしと、御受け申上げたり。　陛下には草刈陸軍豫備病院長の御先導にて、第一に士官病室に入らせられ、在院士官患者の枕邊に立たせ給ひて、一人每に委しく病狀を聞こし召されて「此後尙篤と加養せよ」との有難き御詞を賜ひ、次に下士卒の病室に渡らせられ、重き患者には一々病狀を問はせられて、夫々御慰撫の御詞を賜はりたり。其間患者の起上りて　陛下を拜し奉らんとするをば、御差止めありて、「起くるに及ばず大事にせよ」とのありがたき御詞を賜ひ、尙患者の被へる蒲團をさへ親しく御手にて撫でさせ給ひて、患者に適ふや否やを試みさせ給ふ。此勿躰なき御詞を承りて、患者一同感涙に咽びしのみならず。我々は勿論御後に隨へる人々まで覺えず涙を浮べたり。次に步兵少佐橋本昌世以下、既に創所癒へ復務して當地に在る將校に、謁を賜ひて御詞を下され、又步廊の側に整列し居たる患者（是れは最早創所癒ゑ步行散步等に差支なき者なれども皆病室を出で此に整列し居たるなり）一同を御覽ありて「一同は名譽ある戰地に於て傷病を得て歸りしも今は創所癒ゑ病治まり斯く立並ぶまでに至れるを見て甚だ悅ばし此癒ゑたる有樣を故鄉の父母兄弟等が見もし聞きもしたるならばさぞ悅ぶなるべし」と仰せられたり。次に又衛

兵負傷者の病室を通御あらせられ、敵ながらも負傷の有樣を憫然に思召され、暫く立止まらせられて御覽ぜらる。香川皇后宮太夫は　陛下の御心中を察し奉り、捕虜患者に向ひ一同大切に療養せよと申聞け、通譯官をして之を譯し傳へしむるや。敵の負傷者一同　皇后陛下の方に向ひ合掌し、涙を流して感戴せり。それより元の樓上に還らせ給ひて、更に佐藤軍醫總監を召され「病院には多數の患者を收容し去年來篤く治療に心を盡したる其結果のよきを見て甚だ悅ばし尙此上益々勉勵せよ」又草刈病院長を召させられ「病院職員一同の盡力により治療の結果能きを悅ぶ尙皆々盡力すべし」と仰せられ、患者一同へ賜物あり。其後暫く御休憩あらせらる。此時余は陸軍々樂長に囑し、戰時の婦人なる軍歌を奏せしめしに、聞こし召されて後還啓遊ばさせられたり。

廿四日午後一時より、西練兵場の第一分院へ行啓あらせらる。分院長二等軍醫正渡邊泰藏、赤十字社理事首長淸水俊に拜謁を賜ひ、後各病院を順次御巡り在らせらる。既に全癒に近き者は皆床頭に直立して迎へ奉りしに、御氣色麗はしく「汝等追々全癒し顔色もよく此に立並ぶに至れるを見て甚だ悅ばし」との御詞を賜はり。次に重症患者室に入らせられ、枕頭にて「充分に治療を加へ早く全快せよ」との御詞を下し給へり。外科手術室に入らせられ、總ての機械を一一御覽ありて「病院にて最必用の手術室如此完備するは患者の爲尤も幸にして殊更安心す」と仰せられ、更に各室を御巡覽あらせられて、第十二號室に入らせらる。此は極重症の外科患者にして、毎一室に一人を入れ特に毎人に看護婦一二人を附するものなるが、　陛下は一々病床に就きて御慰撫あらせらる。患者の起上りて拜し奉らんとせし者を御覽ぜられ、渡邊分院長に向はせられ、あれを早く止めさせよと仰せられ、且患者に向はせられては「心靜に療養せよ」と宣はせられ、御涙を浮ばせ給ふを見て、余も常に手巾にて眼を拭ひつゝ御供を申上げたりき。更に十三號室の內科重病者をも同樣御慰撫あらせられし後、第十四號室にて暫時御休息遊ばさせられ。其際　陛下は余を御側近く召させられて宣ふには「宮城の內にてすら寒さの時には屛風を立て廻はして寒さを防ぐに滿州の氷雪に曝さ

れたる上に病の爲斯かるバラック病院に在る兵士等の艱苦はさこそと察せらるゝなり」と、此勿躰なき御詞に接したる余は感極りて涙に咽び、暫し御答も得なさゞりしが、漸くにして軍人は兼ねてより其身躰を鍛錬せるが上に、既に此北淸の嚴寒すら凌ぎし者なるに、廣島は氣候寒からざるが故。此寒さも感ぜず、加之。各室共寢具の用意充分なれど、何卒大御心を安らがせ給へと恭しく申上げたれど、　陛下には殊に御安意の御様子に拜し奉りし。抑、此病院の半分は赤十字社派遣員の受持なれど、赤十字社醫員高橋種記を首め、醫員、看護婦、取締特志看護婦人等には、殊更に御通行懸け拜謁と御詞を賜ひたり。「昨年以來能く其職務を盡したるを悦ぶ尙自餘の者にも此旨を傳へよ」との御詞を賜はれり。斯て各病室を御巡覽在らせられたり。陛下御仁愛の深きは、患者一同感泣せざる者あらず。頓て便殿に入らせらる。　陛下は第一號室の患者等が、御通過後、尙、列を正しく寢臺の側に直立して、敬禮しつゝありしを遙に見そなはせ給ひて「斯く身を煩して長く直立し居たらんには病を重らすの恐あらん心置きなく安臥せしむべし」との有難き仰ありけれど、御側に侍りし余を初め一同聲を呑みて只感泣の外なかりし。此日巡らせ給ひたる病院の歩廊は、長さ六百五十餘間の遠きをも「少しも倦ませ給はず、一々見そなはせ給ひ、親しく御慰撫の御詞を承りし者。誰か感涙に咽ばざらんや。斯くて暫く御休憩の後「午後二時三十分還啓遊ばさせらる。廿六日は雨天なるにも拘らず。午後一時五分國泰寺村の第三分院へ行啓あらせらる。(此日余は昨日馬關にて李中堂不慮の災難に遇はれし爲勅を奉じて佐藤軍醫總監と共に之に赴きしため不在なりし)便殿にて御休息あらせられ、伊部分院長初め病院附職員奏任以上へ拜謁仰付けられ、又在院患者へ下され物を賜はり。分院長伊部軍醫正、草刈軍醫長の御先導にて、第五號室に渡らせられ、患者を御覽ぜられて伊部分院長に「彼等は最早顏色もよくなりたれど誠に悦ぶしと仰せられ又彼の患者等は凡幾日を經れど退院することを得るや」と仰せ給ひけれど、伊部分院長は恭しく御答申上げたり。それより順次各室を御巡覽あらせられ、殊に重症の者には有難き御詞を賜りけれど、各患者は只感涙に咽び

けり。次に軍夫の病室を御慰撫あらせられんとの仰ありしが、伊部分院長は、人夫室だけは御見合せありたき旨申上げたれども、　陛下には御取上げなく、終に入らせられたり。此軍夫患者は概ね凍傷者にして、手足腐爛歩行の自由ならざる者なれども、其室に入御の際も病床に臥したる儘奉迎したり。一々御巡撫あらせられし後、便殿に還御あり。此病院に在る京都府派出の赤十字社醫員、看護婦等の勤務をも親しく見そなはせ給ひたり。暫時御休憩の後同二時五分還啓あらせらる。

廿八日には早朝より折々雨降りし故。いかゞかと思ひ居たりしに、御豫定の時刻に御出門あらせられ、午後一時十五分に白島の第二分院へ行啓あらせられたり。分院　加藤二等軍醫正御先導申上げ、御先發の勅任官より病院附職員に拜謁仰せ付けられ、次に院長を召させられて、患者一同へ下され物を賜はりて後、順次に各室を御巡り在らせられ、半ば癒えたる患者の立並べる者を見そなはせられ「皆々既に癒えて立並ぶまでに至りしは悦ばしき限なり尚能く養生して全く健康を復せよ」との御詞を下され、次に眼科室に渡らせられ、銃丸の碎片にて一眼を失へる者等には「嘸不自由なるべし」との御詞あり。又第一軍の營中に在りて、遂に夜盲となりて歸りし八人の者には「夜間嘸不自由なるべし能く加養せよ」との御詞を賜り、其後脚氣病者にて床を離るゝこと能はざる者の枕邊にて、一々發病せし戰地の事など聞し召されし上「篤と療養せよ」と仰せられ、最後に呼吸器病の重病者のみなる室に渡らせられんとし給ひし時、余は是より内は呼吸器病の重き者のみなれども、其内へは平に御入りを辭し奉る旨申上げたれども、　陛下には入口に稍久しく立たせ給ひ、一々病者の顏を見そなはせられ、御眼に御涙を浮ばせられ「何れも輕からぬ容躰なれども篤と療養を加へ快方に向はんことを望む」との辱き御詞を賜り。夫れより元の廊下を通御ありて御座に復らせ給ひ、佐堂軍醫正、加藤第二分院長、渡邊第一分院長を特に召させられ、厚き御詞を賜り、又余を召させられて一週日各病院を覽そなはせられしに何れも清潔にして萬事能く行屆き居ることを嘉みさせ給へり」。是に於て余は昨年出征以來、我邦の婦人が軍事殊に患者に對して、貴賤

貧富の差別なく熱心を表し、就中、身元の富まざる者までが盡力せしこと、又日本赤十字社、殊に看護婦の功績、又廣島地方婦人が軍隊の宿泊に力を盡せる事、外國婦人が病院に盡せる事業まで悉しく申上げ、是必竟、　陛下御仁惠の餘風に因るものなることを上奏したるに、　陛下には「斯かる軍國の際に當り婦人が此くも心を國事に盡せるは誠に御嬉しく思召さるゝ旨」仰せられ、暫くして還啓あらせられたり。

三十日には呉の海軍病院へ行啓あらせらる。全日午前第十一時「第一呉丸にて宇品を被爲發、呉鎮守府にて暫時御休憩在らせられ、午後二時鎮守府を出御、二時二十分海軍病院に行啓遊ばされたり。島田院長を初め、副長以下高等官整列して奉迎せり。陛下には直に便殿に入らせられ、暫くして院長副長其他高等官に拜謁を賜はり、其後院長の御先導にて「各病室に入らせられ、戰鬪患者に向はせられては「能く身を公に奉じ傷を受くるに至る能く療養の効を積み速に全快せんことを望む」との御詞を賜はり。又平病患者に向はせられては「公務の爲め疾病を招く能く治療を加へよ」との御詞を賜はりたり。戰鬪患者は勿論、平病患者に至るまで九十餘名の患者は、君恩の洪大深厚なるに感激し、御後影を伏し拜みて感涙に咽ばぬ者はなかりし。又患者一同へ下され物を賜はり、再便殿に入らせられ、島田院長を御側近く召させられて「治療の功甚宜し爾後益々盡力せよ」との御詞を賜はり。軈て呉鎮守府へ還啓あらせられ、三時全府御出門第一呉丸にて四時同港を御出發あらせられ、廣島に還啓遊ばさせらる。

各病院行啓の概畧は、前に述べし如くなるが。今又今回の行啓につきて　陛下の厚き思召の廉を尙述べ奉れば、凡此假病院は何れも開戰以來俄に假建てせる建物にして、茅葺又は板屋根にて壁もなく、只鋸引の儘にて鉋も用ひざる板を以て四方を圍ひ、如何にも質素簡約なる小屋同様の病室なれば、本院の他へは行啓在らせられては、實に恐れ多きことなる旨申上げたれども、陛下には少しも御厭ひ在らせられず。今度は患者慰撫の爲なれば、如何に見苦しくても、患者の居る所なれば行きて慰撫すべしとの有難き仰にて、步廊院側又は敷石荒板の所にても薄縁も敷かず、鉋もあてず、平日の儘なる假病院へ行

啓在らせられ、且又病室は板敷にても、衣被寢具等の清潔なるを賞めさせ給ひしは、呉々も御意を注がせ給ふの密なること、誠に有難く感佩し奉りし所なり。

去る廿二日より引續き各病院を巡らせ給ふ。内雨天風日には御順延遊されてはと、香川皇后宮太夫を經て申上げたるも、陛下には「今度は患者慰撫の爲に行啓あらせらるゝこと故患者にさへ障りなくば天氣の如何をいふべきにあらず一日も早く各患者を見ん」とて延ばされ給はざりし。

患者に向はせられて下さるゝ御詞は、皆其大御心の溢るゝ計の御仁心より出づる故に、患者は勿論御側に在る我々も、只感泣に咽びし計りなり。されど余は平生聲も高く詞も明かなる方なれども、御詞を拜するごとに感極りて、聲くもり、覺えず小聲にて其御詞を患者に傳ふるに至れり。餘の人も同樣なりき。

各病院長を首め、「職員等に皆有難き御詞を賜り、實に身に餘れる光榮にして、此後は愈々益々治療に懇切に、万事に盡さゞれどならざることを一同心肝に銘したり。

此御仁惠の勿躰なきは、只に患者の感佩するのみにあらずして、彼の戰地にある軍人が之を傳へきゝしならど、嘸かし勇み進みて一層の勇氣を起すなるべく、又患者の親族が此事を承りしならばさぞ喜ぶことなるべし。

皇后陛下には、曩に東京陸軍病院に行啓あり。今度廣島病院に遠く行啓遊ばされ、戰地より歸りたる患者を御慰撫在らせられしも、第六師團の患者は下の關より歸り、此には居ること少きを以て、御覽遊ばされざるを以て、殊に小松宮妃殿下を召され、小倉、福岡、熊本、佐世保等の陸海軍病院へ遣され御慰撫の御沙汰あらせられたり。

抑、此度各病院へ行啓在らせらるゝや。其際病院に居りし者のみ、此御恩庇を受け奉りしのみならず。内外各地の陸海軍病院に在る者は、皆等しく其光榮を拜受せるものにして、必竟戰役に從事したれどころ、此恩榮を拜受せるものなり。平時病に臥するや。王公大臣と雖、病床に行啓あらせらるゝことなどは思ひもよらざることなるに、國家の爲に戰役にて傷病を得し故にこそ、此恩榮を拜受するなれ。

余や陸軍に身を致し、當年にて廿五年。いかに心と身とを職事に盡すかは、其許の常に知らる所なり。況や万歳一遇とも謂ふべき今度の戰役をや。焦心苦慮、身を以て職に殉して塵も恨なきは上に聖明なる　兩陛下在ますを以てなり。今此概略を記して皇德の厚きを知らしむ。よりて家族知人によく申し聞かされ度候。

三月三十日夜廣島にて

忠　悳

久賀子どの

右は良人の寄せられし所なり。因て思ふに、入院患者諸君の内には、病の爲に執筆に困難なる方もあるべく、又詳に此模樣と光榮とを家鄉に報知せんとする人も多かるべし。然るに直に此を送られなど便利ならんと、急き私費にて印刷し、之を病院に寄贈す。

野戰衛生長官

陸軍々醫總監石黒忠悳妻久賀子

四月二日

●御買上の時計　府下京橋區天賞堂より、京都博覧會へいだせる時計は、御用品として御買上になりたるよしなるが、これは同店より瑞西國に注文し、三ヶ年の月日をへて、出來たるものにて、夜中燈なくとも、ある仕掛により、あきらかに時間を知りうるといふ。

●山階宮殿下の御歌　同殿下には、御齡八十にわたらせられしかど、宮中より御保養に大御心をよせたまひて、たび〳〵優旨を下したまひり。殿下には養老の一として御茶會をこのませられ、また歌は月ごとにろの會を催されしが、日清事件以來は、一切の御嗜好をすてたまひ、ふかく御遠慮の體なりと承はる。このごろの御歌一二。

征清軍の大捷を祝ひ奉りて

日のひかりてらすかぎりは大君の
みいつに背くあたやなからん

靈鷹

やた烏いてしかみよもおもはへて
名に高千穂のとりぞくすしき

●伊國皇族の御來遊　こたびわが邦に御漫遊遊ばされたる伊國皇族アブルッィ親王殿下には、いにし六月十九日を以て參內し、兩　陛下に御對顔あらせられぬ。しかしておなじ殿下には、その後まもなく二十二日をもて歸路に就かれたるよし。

●御婚儀　故內大臣三條公の第二女なる章子には今度京都なる大谷本願寺新門主大谷光演氏と御結婚相との丶ひたりときく。

●遺族を扶助せんとす　このごろ、戸田清子津田梅子このほか六人の婦人が發起人となり、近衛、毛利、松方　大隈、伊東、本野の諸夫人の贊助をねて、さの趣意書にしたかひ、義捐金をつのるといふ

昨明治二十七年八月一日清國に對し宣戰の詔勅を發し給ひてより茲に二百八十有三日にして去る五月十日同國と媾和の條約を交換し給へり天下誰か喜ばざる者あらん之を喜ぶと同時に　故有栖川參謀總長宮殿下を始め奉り故大寺旅團長、故坂本赤城艦長以下の或は戰の爲めに或は病の爲めに國難に殉せられたるを追懷せば天下誰か哀まざる者あらん

元來國家の爲めに身を致し命を殞したる軍人に對しては軍人恩給法ありて其寡婦孤兒に每年若干の扶助料を給せらるゝと雖も遺族の多少を問はずして唯一家に若干を均給せらるゝのみ然るに徵兵令に依りて兵役に服せしめらるゝ陸軍の常備兵は其年齡二十歲より二十三歲(海軍は二十四歲)にして未だ人の子弟たる者多く其死亡一家の浮沈を來すこと蓋し少なかるべければ暫く之を他日に讓り先づ豫後備兵に就きて謂はんに豫後備兵は其年齡二十四歲(海軍は二十五歲)乃至三十二歲にして旣に一家養育の責任あり其死生に因りて一家の興亡を招く者極めて多く其甚だしき老親は病床に在り嬰兒は飢に泣くの慘狀を呈する者亦少なからざるべし

最近の調べに依れば一家の人口は平均五人三分弱なるに彼の軍人恩給法に依りて陸軍兵卒の遺族に給せらるゝ扶助料は一

年金二十圓(海軍は廿四圓乃至卅八圓)にして之を一日に分てば僅八錢三厘強に過ぎず八錢強を以て一家五人餘の衣食住に充つることは頗る難事なれば其筋に於ても他日特別の恩典を施さるゝこともあるべしと雖も此等遺族中既に窮餓に瀕する者あり由りて其の事情殊に憫むべき者を救ひ以て國恩の萬分一に報ぜんと欲するも豫後備兵の殉難者一千二百五十九人の多きに上れるを以て到底少數の微力之を能くすべきに非ず希はくば大方の慈善家同情を表せられて多少に拘はらず御義捐あらんことを

明治二十八年六月　　發起人

●慰問資の募集延期　さきに小松宮妃殿下をはじめまいらせ、各宮妃殿下の御發起により、毛利公爵夫人そのほか貴婦人數十名の主唱にかゝる戰死者遺族慰問資募集期限、東京はこのつき十五日、地方は三十日までなりしが、今度いづれも來月十五日までに延期せられたり。

●朝鮮婦人の大奮發　支那および朝鮮の婦人は、なるべく外出をいみ、他人との交際をきらふは、そのならひなるが。さきごろの朝鮮獨立紀念祭において、かのくにの貴婦人だちか、參列せられたるは、まへに例しなき、非常の大奮發なりしとかや。

●臺灣の氣候　ある特派員のしるすところによれば、臺灣の氣候は、日本にて思ふほど炎熱ならず。その風土の美なる。その山河の秀なる。わが同胞の移住にかなふといふ。正午は寒暖計九十一二度にして、水田はいまをさかりと穗をいたし、桃李の實、など、口にかなひて頗る佳なりと。

●帝國教育大會の結果　いまそのうち初等教育部と、女子教育部とにかゝる問題の要點をしめさん。

初等教育部第一回

第一　幼稚園に入るべき年齢を四歳以上となすの可否

議決　四歳以上を可とす

第二　尋常小學校第一年及二年の教員には男女教員孰れか教員の効果多きや

議決　何れも過半に到らずして消滅

第四　全國小學教科用圖書を一定するの可否

議決　一定するを不可なりと決す

第五　幼稚園兒童の組別をなすの必要なる場合に於ては同年齢の者を一團とすべきや年齢を長幼交錯して一團とすべきや

議決　年齢を長幼交錯して一團とすべし

第十　高等小學校に於て男女教科書を別にするの可否

議決　別々にするを可とす

第十四　小學校作文科中私用文には生徒に教科書を持たしむることを希望す

議決　希望の如く持たしむべし

初等教育部第二回

第一　帝國今後の普通教育に於て修身、地理、歴史の教科用圖書に限り新材料を撰擇し及び折衷するの必要あらざるか若し之れありとせば其程度並に範圍如何

議決　別に之を新撰し及び折衷するの必要を認めず

第二　女教員採用を奨勵するの必要ありや否

決議　有り

第三　教育服制一定の可否如何

議決　一定を可とす

女子教育部

第一　高等女學校に於ては自活的技能を授くるを主とすべきか將内助的婦人を養成するを主とすべきか

決議　内助的婦人を養成すべし

第三　女生徒體操科受持は男教員女教員何れを適當とすべきか

議決　女教員を適當とす

●**八丈島婦人の名**　この頃の戸籍法研究會雜誌といふに、八丈島の婦人の名とて載せたるを見るに、耳新しく感ずる名ども多ければ次に掲ぐ。

にょこ　あつぼ　てこ　ふくまい　けゆ　せゆ
すなな　らゆ　ゆあく　めすゞ　くす　さん
わゆ　てや　はるか　しまか　もとも　かめよ
もちよ　あめゞ　きさつ　ちやわ　みろい　つるれ
いぬ　ちやさ　ごわる　たかりこ　みるかツ　ためよし

みちよし

●漁夫の光榮　さきに　皇后陛下の京都博覽會に行啓あらせられし際、美術舘において三重縣なる中村左十の製鹽の圖、辱くも御目にとまりしが、その圖は、すでに賣約濟となり居りしをもて、さらにおなじ圖を揮毫して差出すべき旨の御沙汰ありたりとなむ。左十は三重縣の一漁夫の子にして天然畫をこのめる者なりと云ふ。

●女子授産場　東京築地なる同場にては、さきごろ、その五周年紀念祭をおこなひたり。内外の婦人令孃雲のごとく、花のごとく、佐々木豐壽女史まづ登壇し、創立以來の沿革をのべ、それより佐々木氏令孃の唱歌あり、つぎて生徒廣瀬すめ子、祝詞をよみ、をはりて生徒一同の唱歌あり、奏樂洋々のうちに紀念會をおはりぬ。

●こつまあきんど　薩摩ことばにて哀れなることを話しながら薩摩がすりを、割合に直段やすく賣りにくるものあり　女のみをる家などにては強談がましきことをいふもあり、又品物を疑へど水をつけてもみても見することあり、さては眞の薩摩がすりなり、店にて買ふよりは安し、がらもよし、と思ひて買ひおき、さてよくよく見れど、眞のものにはあらず、水にも入れぬに色のさむるが如き似せものなり。」

筑前詞にて難船したるよしなど述べ、幸に命をひろひたれど神佛に禮まゐりをする途中なりなどいひて博多織の帶、これも直段安すく賣る、買人に疑はせじとにや、糸をぬきとりてもやして木綿な

らぬよしをも云ふ、是も買ひとりて後に見れど、品あしき小倉織につやをつけたるものなり。かゝる似せものを賣るものをこつまあきんどといふ、其親方は大坂の中にありとか、其親方といふものは世を渡るに困りたるものどもを世話して國々の訛りことどをまづ敎へ、また似せものつくるてだてをも知らすること、いはゞ一の學校のけいこの如くなり、それを卒業するには、蛤の貝五十ほどあとふ、これがこつまあきんどの資本なり、さるものを如何して資本にするぞといふに五十の貝は忽ちびん付油ともなり、あかぎれ膏藥ともなり、ねづみとりともなりて、賣れ、これにてなにほどか黄金を得、黄金を得たるは及第したるなり、この及第したるおそろしき學士は、この黄金を更に資本として金山寺味噌賣ともなり、かるやきうりともなりなど種々に修業をかさねて、遂に反物賣りとなる、反物賣りとなれど、即ちこつまあきんどの博士となりたるなり、このおそろしき博士は、夜々木錢宿の二階にてキリシタンとかにも増りたる不可思議の術にて、小倉織を博多織とし、大和かすりを薩摩がすりとして、日々賣りあるくとぞ、東京のみにてもこのおそろしき博士學士が二百人にも餘れりと聞く、ひめたちよ、ゆめ／＼安ものかひて錢うしなひ給ふな。

●蜜蜂の利益　蜜蜂の飼養は、女子の職業にかなふより、米國のごときは、婦人の業として、おほきは一ヶ年五千圓より一萬圓の收入を得るに至れり。わが邦においても暖かなる關西地方におい

ては、ふるく寛政年間よりこの業をなす者あるも、いまだ充分の結果を収めざりしが、近來その利益を知りて漸くこれを飼養する者あるに至れり。ことにこのごろ静岡養蜂場主人青柳洗次郎氏の如きは、おほいに意をそゝぎて蜜蜂の飼養につとめ居るとかや。

●本年の蠶業　各府縣における本年の養蠶は、昨年に比し、その繭の收獲のみこみはかくのごとし

東京府	増收の見込	京都府	増收の見込
大坂府	不詳	新潟縣	増收の見込
群馬縣	増收の見込	千葉縣	豐作の見込
茨城縣	増收の見込	栃木縣	増收の見込
奈良縣	同	滋賀縣	平年より減少の見込
鳥取縣	豐作の見込	山口縣	増收の見込
香川縣	増收の見込	愛媛縣	好況
高知縣	平年より増收の見込		

また蠶兒のありさまは

東京	四月下旬	前年に比し増減なし	生育佳良	桑葉有余	増繭の見込
京都	四月中旬より五月上旬	同二割余の増加	氣候適順生育佳良	同上	増收の見込
大坂	四月中旬より五月上旬	……	同上	……	……
新潟	五月上旬より同中旬	前年より増加	同上	桑葉有余	仝上
群馬	四月下旬より五月上旬	……	生育佳良	桑葉不足	同上
千葉	四月中旬	前年より増加	同上	桑葉有余	豐作の見込
茨城	……	……	同上	桑葉不足なし	増加の見込
栃木	四月下旬より五月上旬	前年より減少	氣候適順生育佳良	桑葉有余	同上
奈良	四月下旬より五月中旬	前年より増加	同上	桑葉過不足なし	同上

滋賀	四月下旬より五月上旬	…………	生育宜しからず	…………	平年より減少の見込
鳥取	同上	前年に比し増加	氣候適順生育佳良	桑葉有余	豊作の見込
山口	四月下旬	同上	生良佳良	同上	増加の見込
香川	四月中旬より五月上旬	前年に比し増	同上	…………	同上
愛媛	四月下旬	…………	氣候適順生育佳良	…………	好況
高知	四月上旬より同中旬	前年に比し増加	生育佳良	桑葉有余	平年より増加

●教員檢定試驗及第者　さきに文部省に於て、執行したる教員檢定試驗及第者にして、大臣の裁可を經、及第證書を授與せらるべき人員は、百九十九名、そのうち女子六名にして、科別は左の如し

佛語科　一	教育科　四	數學(代數幾何)三四
英語科　六	測量科　三	同(三角法)　十三
獨語科　四	化學科　一	修身倫理科　五
國語科　廿二	商業科　二	習字科　十三
音樂科　一	解析幾何　三	歷史科　六
農業科　四	物理科　三	圖畫(毛筆)　二
家事科　三	地文科　七	同(鉛筆)　四
簿記科　四	地理科　九	動物科　一
通体操科　五	漢文科　十八	鑛物科　五
兵式体操科　八	植物科　六	生理科　五

●韓客の女子教育　この頃、朝鮮農商工部主事孫永吉といふは、わが國の農商工業の視察に來りたるが、一行のうちの劉堂といへるは、教育熱心家のよしにて、京都府高等女學校を參觀するや、はじめは何のこととも わからねど、唯、女子をあつめ、衣服を飾り、容姿をよろほふのみと心ゑしが、何の感じたるやうも見ゑざりしに、同校長より、同校教育の主旨、たよび、景況など說ききかされ、亦、各教室を巡覽して、教授の實際を見、たはい

に、女子教育の必要をさとりしものゝ如くにて、同校長にむかひ、歸國のうへは、ことし八歳になる、おのが娘を遣はすべけれど、同校に留學をゆるされたき由のぞみたり。校長は、そはよき希望なれど、さる幼女は、小學校に入學せさすこそよけれ、と諭したるに、劉は、なほ解せぬやうにて、府廳にいでしをり、ふたゝび、一坂書記官にむかひ、同やうの希望をのべたりしかど、書記官は、校長と同じやう、これをさとし、また、幼女を一人留學さするよりは、むしろ、十名以上をおくるこそ得策なれ。さすれど、及ぶ限り、力を盡すべし。とをしへけれど、劉は淺きによろこび、いたくその厚意を謝して、皈國のうへは、早速、留學女生をおくりこすべきむね、答へてかへれりと。善いかな。劉堂が着眼や。

●たのしき時節　諸嬢が學年試業も、やがて、をはりをつげむ。諸嬢が一とせのうち、學の窓のもとにくるしめし脳ずゐをなぐさめ、身体のはやちをなす、避暑のよきをりは近づきぬ。長汀曲浦、水きよく砂ましろなる濱べにいで、海水浴をするもよし。山高く蔭ふかきわたり、温泉に浴して、俗塵をあらふも、また、よからむ。あるは、濱の松風、峯のあらしに琴かきあはせて、心をむかふの郷にはせ、おもひを幽玄の境にやるとも、そは、諸嬢のこゝろにまかすべし。たゞ、それ、あそぶにも儀あり。海水に浴むるにも、肌あらはに、胸乳かきたれたるは、沖のみるめも恥かしく、女のたしなむべきことなり。温泉場は、をとこ女のいりま

じるところ、ねて、けしきうはさのたちやすし。身ぶんれもき孃たち、つゝ怠みの上にもつゝしみ給へや。あまり暑しとて、氷を多くたべ給ふな。流行病のをりから、よからずと、いまさら、いふまでもなきことながら、くれぐ\も、心づけたまへかし。

●虎列拉病に對する攝生法　衛生上の事は婦人の職分として、最、必要なるものなるは吾人の屢々唱導する所なり且へ本年は戰後の常として惡疫の流行も計られざれば尚更婦人方の注意を望まざるを得ず今占領地に拉病發生のとき、山内軍醫正か軍隊に示し行はせたる各自攝生法を左に示さん

一　生水を飲用するは火を以て彈藥中に入るが如し斷然せざる可らず
一　飲食物は總て煮沸したるものに非れば必用うべからず
一　魚類は能く煮熟したるものに非れば食すべからず
一　魚類の生身所謂刺身は必食すべからず
一　土人の販賣する飲食物は可成食せざる樣にすべく殊に天麩羅、色染したる菓子類は嚴に禁ずべし
一　日本酒、ブランデー其他酒類は多飲すべからず
一　多人數集會し或は會食等の事をなすべからず
一　海水浴等議をなすべからず但し風なき時身體を水にて清拭するは此の限にあらず
一　蠅は病毒を媒介するものなれば可成食物よ集らざる樣注意すべし
一　裸體にして就寢すべからず夜間は最も衣を脱すべからず
一　服裝は決して脱すべからず
一　家屋の壁は猥りに破壞すべからず若止むことを得ざる場合あらは醫官に協議すべし
一　炊事場は最も清潔にすべし下水の流水を能くし惡水の沮滯せざる樣にすべし
一　裸體にて常に起居往來すべからず
一　便所邊に不潔の所は日々掃除を忘るべからず

●第八回　尋常師範學校尋常　中學校高等女學校教員檢定試驗問題(つゞき)

○簿記（數學簿記）試驗問題

(一)簿記法の種類及其相違を問ふ
(二)商業帳簿に關する商法中の規定の重なるもの

を問ふ

(三)普通商業(賣買)に要する帳簿種類及其使用法并に各帳簿の關係如何

(四)銀行帳簿の種類及其關係を精記せよ

(五)簿記例題中に、商品を賣買する時に當坐小切手約束手形爲換手形荷爲換手形等を以てすと云ふ事あり、是等の小切手又は手形とは如何なるものなるや

(六)簿記學教授上の注意を問ふ

(七)甲某乙某より紡績糸百駄を八拾四圓替にて買入れ代金の內金貳千圓を小切手にて三千圓を約束手形にて仕拂ひ殘額を甲某の借とせり右取引を仕譯せよ

(八)帳簿結算に付商品の損益を見んとするに元帳商品勘定借方三萬五千圓貸方二萬五千圓商品棚卸見積高一萬三千圓なる時は如何なる記入手續を以て損益を求むるや其各法を記帳して示すべし

(九)損益勘定の借方及び貸方に入るべき勘定科目の種類を舉げ各其性質を說明すべし

(十)仕譯元帳なるものを案して其雛形を示せ

○動　物　(設問)

(一)魚弓及魚孔とは何か其脊椎動物各部類に於ける成行如何

(二)かものはしの類は哺乳類か、最低の地位を與ふる理由如何

(三)節足動物の有する呼吸器の重なる種類は幾許あるか其位置構造及ひ呼吸を營む方法を說示せよ

(四)形態上模範たるべき昆虫の外形と口部の構造を描きて之に各部の名稱を附せ

(五)からすかひの足はいかの何に相當するや

(六)棘皮動物の水脉管を說明せよ

○生　理　(動物科中の生理)

(一)心臟を主宰する神經
心臟固有の神經中樞と外來の神經と兩種の作用を知りたし

(二)味感
味感器の構造、味感の種類及ひ味感に影響を及ぼすべき種々の事件

○動物實驗

(一)獸類の頭骨三種を示して之を鑑定せしむ

(二)魚類の腦を示して其嗅神經を問ふ

(三)左の實物を示して其所屬の科目を問ふ

(い)「ホヽツキガヒ」一
(ろ)昆蟲類　八種
(は)珊瑚類　二種
(に)棘皮動物　二種

○生理實地　（動物科中の生理）

(一)皮膚の横斷面を顯微鏡下に示して其何たるやを問ふ
(二)脊髓の横切面を示して其何たるやを問
(三)筋肉の働作するとき短縮豐厚となることを如何して示すや
(四)或る分秘液に蔗糖少許を加へ更に稠厚硫酸を注ぎて凡ろ七十度の温度を有するに至るときは紫色を呈す此分秘液は何なりや

○教授法　（動物）

動物の人爲分類と自然分類の區別を理會せしめんとするには如何なる實例を擧げて説明するを最も良法と考ふるか

○生理科

設問

(一)躰温の發生及其調節に就て動植物を比較せよ
(二)歩行とは何ぞ行と走との區別如何
(三)部位覺に就て知る所を記せ
(四)酒類の身體に及ぼす害に就て知る所を記せ

○授業法

循環生理を高等小學校生徒に三時間にて教授するには如何なる個條を摘み如何なる順序を以てするを良とするか

○實　地

(一)骨組織を鏡下に照して其何たるやを問ふ
(二)肝臟組織同上
(三)ビウレート試驗法を示して其何たるやを問ふ
(四)トロンメル氏驗糖法を示して其何たるやを問ふ
(五)撓骨を示して其何たるやを問ふ
(六)脊椎骨同上
(七)内耳を示し先づ其何たるを問ひ次に蝸牛殼及び三半規管の名稱及び管能を問ふ

○博物科植物學

設問

(一)なたねなの花には雄蕋幾本花瓣何枚あるか
(二)ふぢとききくの花序を何と稱するか
(三)雌雄異株と雌雄同株の例を各一つを擧げよ
(四)ぢらの雄蕋は上位なるか下位なるか
(五)ごまとうめの果實を植物學上何と稱するか

(六)たけは何科に屬し又其俗に根と稱する者を擧問上にては何と稱するか

(七)ねぎ、さつまいも、じやがたらいも、だいづの食用とする部分何なるか

(八)根冠は何の用を爲すものぞ

(九)同化作用と呼吸作用との區別を要點に記るせ

(十)植物學は何書に就きて學びたるか又參考として何書を用ひしか其書目を擧げよ

○實物

(一)左の實物を解剖して之を記載せしむ

はこねうつぎ

ちぎなでしこ

(二)顯微鏡を以て羊齒類の葉の斷面を示して其組織の種類を鑑定せしむ

○教授法

植物學を教授するに必要なる一方法として實物を黒板上に摸寫せしむ

○鑛物學試驗問題

(一)六結晶系に對し模範となるべき各一の鑛物を問ふ

(二)金銀銅鐵鉛鑛の(a)成分(b)成因(c)共生(associati

(e)并に(d)産出の狀態を問ふ

(三)如何なる方法及び如何なる點にて左の三鑛物を區別すべきや

(1)黄玉　(2)正長石　(3)磁鐵鑛

(四)成層岩と塊狀岩は其構造及び現出の狀態に如何なる差あるや

(五)砂石、粘板石、石灰石、並に子持石等の相互に累積して地層を爲す理由を問ふ

○鑛物學教授法

鑛物學を授くるには如何なる順序方法に依るべきや且つ時に野外に於て說明し易き事項は如何

○鑛物學示物問題

左の鑛物を示し其特徴等を說明せしむ

黄玉石　正長石　柘榴石　方解石　玉滴石　赤鐵鑛　重晶石　クローム鑛鐵　黄鑛鐵　片麻岩　ふずりな石灰岩　アンモン貝

●色紙短冊　本誌に掲げたる色紙幷に短冊は松平健子夫人の親筆なり、なほつぎつぎに諸家の染筆を請ひて掲ぐべし、ひめたちの歌をかき習はれんときこれらを手本とせられなば便よからん。

●受賞者

正三位勲二等岩倉具定妻
久　子

明治廿四年十月震災の節、愛知縣下罹災窮民へ金十圓賑恤

東京府南多摩郡八王子町折田佐兵衛母　ま　す

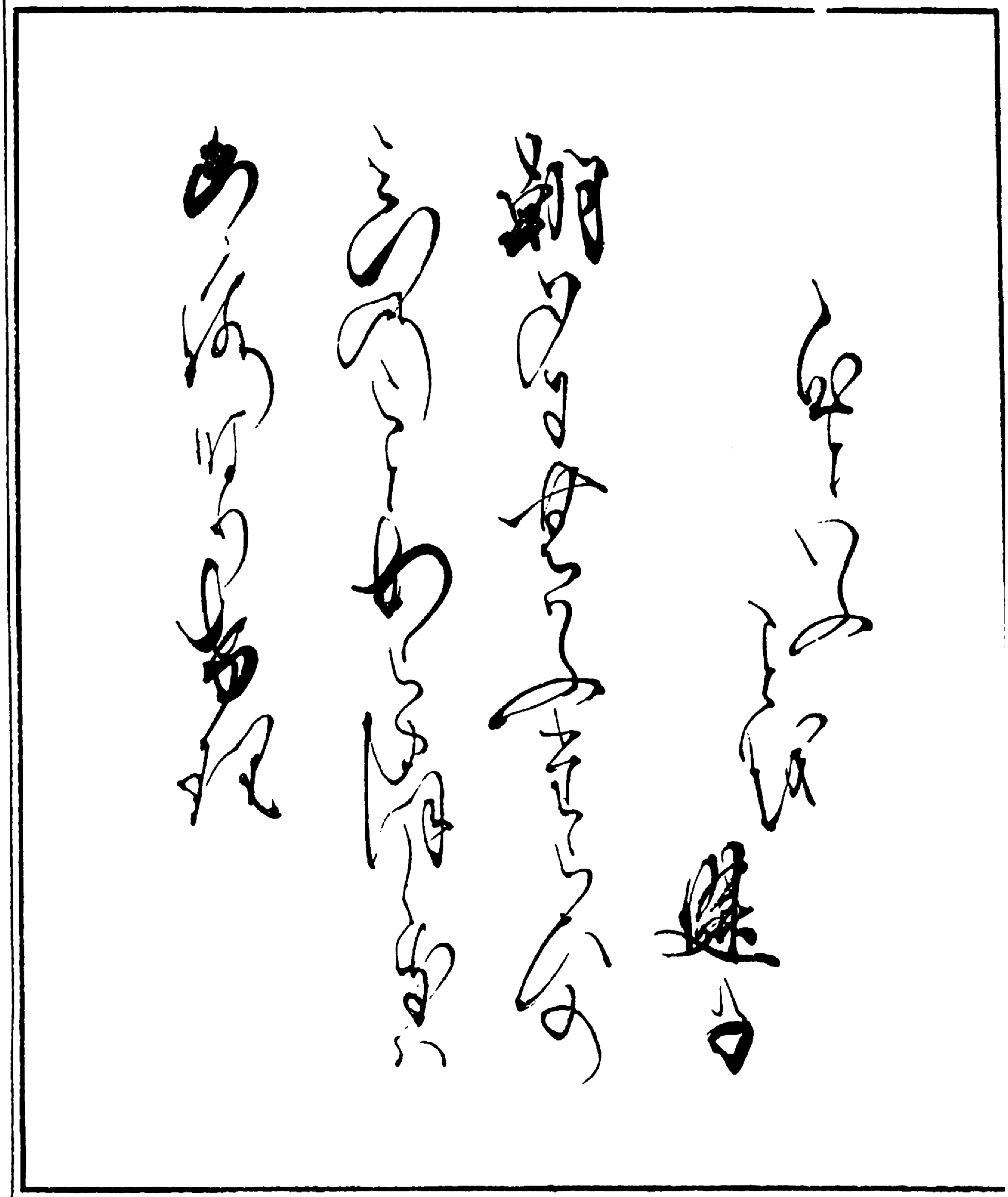
夙に博多織物の改良に志し、其夫を扶け、其子を勧め、共に其勞に服し、其業を營み、四十四年一日の如く、遂に佐兵衛父子をして、屢々褒詞下賜の榮あるに至らしめしは、實に其功多きに居る。洵に奇特とす。仍て其賞として木杯一組下賜す。

埼玉縣秩父郡原谷村亡町田勝太郎妻　町　田　き　ん

資性柔順、平素夫に仕へて貞實、殊に明治二十三年、夫病に罹り身體自由を失ふや。深く心を看護に竭し、其餘暇晝夜を分たす、蠶農に從事し、家計困難なるに拘はらす。其嗜好は必ず之を薦め、自ら負ひて市に往き、病者を慰むる等、志操を變せざる、茲に十有餘年一日の如し。洵に奇特とす。仍て其賞として、金二圓下賜す。

○正誤　前號文林落合爲誠氏樵石先生を送る文中塵を揮ひては麈を揮ひての誤に付きこゝに之を正す

さんごたく
めしきへ
こはしやはらかし
おもふまゝには
ならぬよのなか



教の庭

六月五日兼題　蓮（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

濁りたる池のこゝろに似ぬものは
はちすの花のいろ香なりけり

地　東京赤坂區一ツ木町　河田いし子

咲いつる池のはちすのはなのかに
わくる朝戸のいそかれにけり

人　松山市北八坂町七十七番戸　久門利玄子

おく露にひかりをそへて月かげの
やどるも涼しはすのうき葉に

人　東京日本橋區一丁目廿四番地　諸井久良子

風わたるおともすゝしくゆふ露の
こほるゝ池ににほふはちす葉

さきいつる池のはちすの花にこそ
うきよの外のいろは見えけれ　井出信子

あさむかぬ玉とも見えつゆふ風に
こほれてにほふはちす葉の露　磯邊つや子

月やどるはちすの露を吹くかせに
玉をちらせるなつのゆふぐれ　住山幾子

そこにこる池のこゝろも知らすして
露にきはへるたまはちすかな　住山せの子

おく露をふかぬひま社ちりの世も
風のまに〳〵かをるはちす葉　住山靜子

朝風ににほひこほれてかをるなり
はすのひろ葉の露のしらたま　安井章子

ありあけの月のひかりに花はちす
ひらくを見ればこゝろ涼しも　瀬戸榮子

はちす葉の露のしら玉あさかせに
ゆらぐを見れど涼しかりけり　道廣八重子

かせわたるいけの蓮のたち葉より
玉とみたれてつゆそこほるゝ　風間千代子

いけのへの蓮のたち葉にかせすみて　堀内えん子

亂るゝつゆのたまのすゝしさ

蓮葉におきよくもおけるつゆのたま　戸澤千壽子
ちらすや風の咎にやあるらん

新しみ今朝たちかへしはちす葉の　田邊寶子
露ふきみたすかせのすゝしさ

誰か袖になつかしき香の移るらん　里吉てる子
花にさはらぬはすのうはかせ

風ふけは亂るゝつゆのたまはちす　長島綾子
映るもにほふ岸のはすのいけ

ゆふつきのかけすむぬまの涼風に　長島諒子
こゝろきよくもにほふ蓮かな

よの中の濁りにしまぬはちすはな　長島花子
きよくかをれる岸のはすのいけ

池のおもに今をさかりとはちすはな　長島信子
さきつゝふくむつゆ匂ふなり

濁りにし池のうきくさろのうへに　神田鋪子
こゝろますしてさける蓮はな

朝はらけ池のはちすをみわたせは　水島清子
濁るうきよもしらなみのいろ

蓮はのつゆの玉みつはら／＼と　濱口寛子
かせにこほるゝ音のすゝしさ

つきやとる蓮のつゆのすゝしさも　西村芳子
かをりと共に身にそしみける

濁りにもしまぬはちすの露みれは　西村喜子
こゝろの隈もすみわたりけり

みさ比江のにこりにしまぬ蓮葉の　神田雪子
はなの色香はくもりなきかな

風かをるわしたの池の花はちす　越山雪子
めさまし草とたかいひにけん

池殿のさすまくそてになきさなる　岡田波子
はちすの花のかすにほふなる

いけ水のはちすの花のさくれとを　岡田紗子
ふみよむ窓にきくろうれしき

朝かせにはちすのつゆの玉ちれは　西村京子
うきは涼しくかをるあさかな

折る人のそてふきかへすあさかせに　遠藤千勢子
亂れてにほふいけのはちすは

廣澤のいけのはちすはあさな／＼　近藤蓮子

たまとみるまて露ろこほるゝ

池水のにこりに染まてあさな／＼　小川　富子
さくやはちすの花もうるはし

ろよ／＼とふきくるいけの蓮のはな　小川きん子
つゆの玉散るたともすゝしき

折りとるはいとやすけれと朝つゆの　小川すみ子
ふくむをみれはをしき蓮は

けさ迄は露をふくみしはちすはも　根岸初音子
ふきくる風に花やこほれん

つゆふくむはちすに映る朝日かけ　根岸　杉子
風にくたけてちるこゝちよさ

あさ起て袖もすゝしきわかせなか　溝口　久子
すかたのいけの花はちすかな

いつしかにはちす花さく音のして　神田　敏子
あしたしつけき此いほりかな

危ふけにつゆをふくみて散もせぬ　神田　繁子
匂ひゆかしきいけのはちすは

濁り江も清きはちすのはなさけは　西村さと子
朝よりかをるかせのすゝしさ

あさまたきいけの蓮のはなの上に　曾山　道子
こほれもはてす露ろふくめる

光りさへたまとあさむく花はちす　島田　好子
ふくめる露も香にほふなり

池の面につゆをふくめる花はちす　中島　房子
やとるもすゝしありあけの月

にこりなきいけの蓮のはのうへに　中島　董子
たまるも清しつゆのしらたま

白つゆをつゝむはちすの卷葉より　松原　常子
たまゆりこほす水のすゝしさ

あさまたき池のはちすの花みれは　浦島　龜子
いとゝ涼しきこゝちするかな

玉とみしはちすにやとる白つゆは　成田　延子
あさ日の影にひかりうるはし

朝ぼらけはちすの上のつゆ見れは　溝口　惠子
玉のたてなといふへかりけり

ふく風にはちすの卷はうこけとも　西村登羅子
やとれる露はこほれさりけり

しらつゆの光りも涼しいけの面の　野田千代子

はちす吹しくわせのかをれは

とく起きて匂ふはちすの花みれは　荒川　清子
　いま盛りなりしのむずのいけ

朝風のすすしくわたるいけの面に　楠　精子
　清きこゝろをみするはちすも

にごりたる水をはなれて此あさけ　芝田　源子
　はちすにたけるつゆの涼しさ

忍はずの池のはちす葉あさごとに　瀧口　秀子
　たまとみる迄つゆぞこほるゝ

ありあけの月ものこりて池の面に　吉川　純子
　匂ふはちすのつゆぞすゞしき

色もかも浮よのものとれもはへす　水島　良子
　池のはちすのはなのさかりは

朝かせの吹くにまかせて薫りくる　荒井　菊子
　いけのはちすの花ろゆかしき

ふくかせも心してけりこのあさけ　松原　佳子
　はちすのつゆの玉と見ゆれは

けさみれは池のはちすの花の上に　遠藤ちか子
　おきろふつゆの玉ろすゞしき

みわたせはあさつゆ深く置にけり　澤田　俊子
　また咲きみたぬ池のはちすに

あさはらけはちすの花の上にふく　溝口　直子
　風ろかをれるしのむずのいけ

はちすさく池をゐながらみる宿は　神田　樂子
　よをのかれたる人やすむらん

釣殿のをすふくかせもかへるまで　神田　錦子
　いけのはちすの花さかりなり

白露のかはかぬうちのはちすはに　木村　兼子
　すか〳〵しくもふける朝かせ

有明のつきもやどりていけの面の　高橋　波子
　はすの上はにふくむしらつゆ

池水のにごりかちなるひとの世に　畠山千代子
　はちすの花のきよくもある哉

玉もてる人につみある世ならねむ　丸山須磨子
　はちすの露ぞことにすゞしき

にごり江の濁にしまぬはちす葉の　鈴木美惠子
　こゝろを人のこゝろともかな

玉よりもめてたかりけり世の人の　牧野　梢子

こゝろけかさぬはちす葉の露

濁りたる浮世のものと見えぬかな　牧野　幸子
清くさきたるいけのはちすは

いけ水の濁りにそまてはちす葉の　池谷らん子
露さへきよくかをりぬるかな

いけの邊に立よる袖もにほふなり　伊賀なを子
きよきはちすの花のさかりは

吹く風にくだけてはまた玉とれく　杉浦いと子
露にいろろふいけのはちす葉

咲いつる池のはちすのはなのかに　河田いし子
わくる朝戸のいろかれにけり

濁りなきいけの心をいろに見せて　梶井　久子
にほふも清きはなはちすかな

香くはしき風のたよりに立よれむ　吾妻ちか子
いけのはすの花さかりなり

さや〳〵と風に音してはちすはの　館協萬寸子
うこくに露のたまろみたるゝ

池水にうつる蓮かけのみか　山本いと子
つゆさへそてに匂ひぬるかな

はちす葉のうへにやどれる白玉に　大谷津琴子
けさ咲く花のかげぞうつれる

花はちすさかりの頃はゆきかひの　金田しけ子
人のたもともにほひけるかな

はちす葉の露のこぼれていけ水の　林　かの子
にごるこゝろも清みやゆく覽

夕されば涼しくもありはちすはに　中村つき子
きよくもにほふ露のしらたま

花はちす匂ふを見ればおのづから　中村なか子
人のこゝろもきよみゆくなり

れき出てゝまつ見る池の花はちす　清水きよ子
こゝろも清くにほふあさかせ

朝日かけれく露さへもてりそひて　松下よし子
清きこゝろの見ゆるはちす葉

涼しさもあさいの夢はさめにけり　植木　鋼子
池のはちすのはなひらくころ

勝間田のいけのはちす葉涼しくも　新井みちを
露のしらたまのせてけるかな

れきわたす露のしら玉みたさしと　羽田みね子

葉ごとにとめて咲くはちす哉

にごり江にそまぬ心ははちす葉の　内田はる子
うへにや見する露のしらたま

池水のにごりをよそにはなはちす　内田たけ子
いろ香清くも咲きにけるかな

濁りにはしまで咲くてふはすの花　市川　柳子
かげまで清きいろに見えけり

なか〳〵に色あるよりも白はちす　上野　道子
清きこゝろのしるしとぞみる

にごり江の濁にそまぬはちすはな　中尾よね子
きよきかをりを朝かぜにふく

はちす葉に玉とおきなすしら露を　白井たま子
つなぎてとめむ緒紐しもかな

しのばずの池のはちすの花さかり　水野　池子
今朝はわさいもやすからぬ哉

はちす葉は露を玉ともあざむけど　花井よし子
これがうてなも頼まれぬかな

かはづなく池のはちすの花さきて　下谷　佳子
けさすゞしくもかをる朝かぜ

いけ水のにごりにしまぬ花はちす　平野きみ子
色さへかさへなつかしきかな

池水のにごれるなかに生ひ出て　檜村美世子
けたかくかほる花はちすかな

池の面のはちすのうきはに風すぎて　師岡千代子
ゆらぐもすゞし露のしらたま

池水のにごりにしまぬこゝろこそ　名取正代子
名におふ花の君にはありけれ

蓮葉のにごれるいけに生ふれはや　佐治　房子
おく白つゆをたまとあざむく

蓮葉におくしらつゆのきよげにも　中原　夏子
かぜにみだるゝさまぞ涼しき

世のちりにしまぬ心をはなはちす　勝家かをる
みせて清くも咲きにほふらん

にごりにもしまぬ心をかゞみにて　伊藤　敏子
世にへつらはぬ花はちすかな

朝日かげ水にうつりてはなはちす　大海原芳子
池のこゝろもきよくあるらん

はすの花さき清めたるわがやどは　太田　貞子

浮世のほかのこゝ地こそすれ

日にまして生れひろこれる蓮葉に
池の面せまくなりにけるかな　高野たつ子

おきあまる露にも朝はすゞしきを
香をりいてたる花はちすかな　樋口のぶ子

夕立のさわきて過きしいけの面に
にこりをとめぬはちす葉の露　大橋てい子

しはしたにひとの心をはちす葉の
つゆの清きにおくよしもかな　青羽茂技子

池水のきよきこゝろもはちす葉の
うき葉にむすふ露に見えけり　三木　秀子

夕風にいけのみきはのはちす葉の
こほるゝつゆろ涼しかりける　岩崎　今子

はちすむの露の白たまゆうかせに
こぼれおつるも涼しかりけり　鎌形　素子

しのむすのいけのはちすの朝風に
ひらくおところ涼しかりけれ　諏訪　晴子

池みづのにこりにしまて花はちす
ひとりきよくも咲にほふかな　三原　照子

おくつゆの玉もこほれていけ水に
はすのひろはのゆらく涼しさ　永井　良子

池水も見えぬはかりにはちす葉の
廣はしけくもなりにけるかな　重松　髙子

玉なしておくと見るまにうちろよく
風にこほるゝはちす葉の露　久松せい子

とこ世なる庭もかくやと思ふまて
池のはちすのはなさきにけり　青木　春子

世のちりに染まぬ心の蓮葉は
はなの上にもあらはれにけり　福澤喜代子

しら露を玉とみせたるいつはりは
清きはちすのこゝろなるらむ　山田かく子

吹わたる風なつかしくかをるかな
池のはちすのはな咲きしより　山田てる子

池水のにこりし色も見せぬころ
きよき蓮の心なりけれ　吉田　芳子

心すむ池のかゝみにかけふかく
うつるもきよき花はちすかな　河野　文子

池のおもに浮ひいてたる蓮葉の　近山まつ子

きよくやどせる露のしら玉

花はちすきよき心に池水を　荒瀬ふさ子
にごれりとしも思はさるらん

我池の蓮の花の咲しより　坂本　乙子
柴折戸たゝく友をこそまて

池水のにごりにしまぬ蓮はな　中村ます子
きよきこゝろは色に出にけり

おもしろや池の汀のしらはちす　佐藤せき子
かぜにそよぎて鷺かとぞみる

さもきよく咲き初めにけり蓮の花　矢澤たけゑ
つゆ世の中のちりに染らで

よのちりにけがれし宿の池にさへ　林　久子
さけるはちすの花のきよけさ

なほさらにきよく見えけり朝風に　廣田とめ子
露のたまたるいけのはちすは

池水のにごれる中に生ひ出て　松尾　菫子
浄くもむすふ蓮のしら露

にごり江の中にねひたるは蓮ぞな　雄久津美智
濁りに染まず咲けるうれしさ

にごり江のにごりにそまぬ蓮すら　松田　靜枝
移らふ色を世にまねふらむ

六月五日兼題　靈祭の詞

天　東京牛込區市ヶ谷甲良町十一番地　青木　春子

はださへとほす冬の日も土さへさくる夏の日もいとふこととなくうむこともなく日毎に同じ教の庭にかよひていそしみ學びいづるにもいるにも共にせし君が今はこと世にすみ給ひてまたあふときなくなりぬるぞ悲しきことの極なるや人の命はつねなきものとはいへかばかりはかなきものとは思はざりしを何事も夢の旅路をゆく心地ぞかしこの後はうるはしき春の花もさやけき秋の月もたれと共にかめでんたれと共にかながめん浪にたゞよふ捨小舟ひく人もなきわが身にはうらめしともかなしともいはんすべを知らす

君うまれつきかしこく人にすぐれてすべての學科うるはしきのみか心ざますなほにしてくれ竹のまがれるふしもなくたれかれ分かずうつくしみ給ひ

けれど師の君はじめともどちのほめたゝへぬものぞなかりきあはれ君に千代のよはひをたもたしめなど二千万姉妹のかゝみともあはがれ給ひ皇國の女の風もいよ〳〵匂ひて汐路はるけき外つ國までも吹きつたへたらんに思へど〳〵うれたき事のかぎりになん今日は御靈祭りのむしろにのぞみかしこみうやまひてうみやまのめづらかなるものをそなへなみだとともにかきつゞりし一ふしを御祭りの詞にかへてきこえまつるをあはれとみそなはしてうけ納め給へてよあなかしこ

地

山梨縣甲府市　山田町　名取正代子

今年もはやなからすぎて七夕の文披月とはなりぬおもひめぐらせむけふは遠つみおやの五百年のみいみまつり日なりけりよりてはらから親しき友たちなどよびつどへてそが魂まつり仕へ奉らんとてかねてたしなみ給ひにきと聞つるものども御食に御酒をはじめからうた大和歌其外何くれとなくみまへにそなへ奉りて懇にみたまをなぐさめまつりぬるか中におのれは「なき人を恋のふ涙の玉まつり又今さらの心地のみして」といふをそなへまつりぬおもへど我家も此長の年月いさゝかかはる事なくさかえつゞきおのれはまた此かしこき大御代に生れ出て事に物に足らはぬ事なくいとやすらかに樂しくあかしくらせるもこれみな遠つおやのみめぐみにこそされは幾春秋までもそろの徳をしたひ功をあふぎ御敎をまもりおのがわざをむいそしみてかしこきみめぐみのかたはしにだもむくい奉らまほしうなん

人

千葉縣佐倉　植木鋼子

年ことの文月十五日にはなき人の歸りくとてたままつりと名付けて大かたの家毎に香をたき花をたて燈火をかゝげ茶菓など備へ又はさるへき僧などを請じ讀經をなしおのか信心のまに〳〵何くれといとなむさまあはれともいとし悲末の露下の雫後れ先立も世の例ひとはいへなき跡を賴むへき人にたにあやなくも先立れ或はいとけなくて親はらからにおくれたるいつの世にかは忘らるへき魂祭るたく

まし〳〵其悌をしのへどもむなしき香の煙りにむせひてつきせぬ涙のみ袖にせきあへぬろはかなかりける

佐々有鄰子

うまこりのあやにかしこきはるはなのたふとき大將の少將軍きみはしもあきつ神わが天皇のみことかしこみ山ゆかむ艸むすかむねのどにはあらじと朝には燒太刀の敏ごころふりれこしてとさへくから國の山野をふみさぐみ夕にはひひらぎの八尋はことりもらはるかすみ威海衛の戰場にたちむかひたまひしかあだどもが打はなつ大砲のけふりと大空高きいさをたてたまひて降しく深雪の如く正身は消ねたまひぬ故この神床のひもろぎの眞さか木に劒鏡をとりかけ海山河野の種々の食物を八取の机に横山なす置たらはして同學の姉妹等と夏菊の花ふさ打捧もちて少將軍の神靈の前にうなねつきたくひまれなる勳功を稱へ奉りて靈祭仕奉るさまを平けく安けくきこしめせとかしこみかしこみも白す、

太田　貞子

なが御たまの御前にまをさく現し世の限りあるものとはいへさらぬ別れの道ぞかり悲しきわざはあらずかしなが御たまのかくり世にまかりましてよりめぐり行く月日のたゆたふひまなくはや五十日といふ日になりぬるを麗はしき面かげは何世にましますらむとおぼねてあした夕べに慕ひまつり忍びまつる事になむわれらは汝がよはひを百年五百年といのりまつりしを何しかも斯く急きいにたまひけむ何しかも何餘りある春秋を重ねさせたまはざりけむされどなが御たまは現身とともには消ね失せたまはで長へに天かけりめぐり〳〵てわが身にまが事あらせずわが家の行く先安らけくひた守りに守りますらむとおもふにもせきいづる涙の雫ひまなき露はすに袖もくちぬべしやかれ此日をもてうからやからを初め古き親しきおの〳〵打ちつどひてみけつものたてまつりみたままつりつかふまつるさまを平らけく安らけくきこしめせとかしこみ〳〵まをす

松田　靜枝

きのふけふと思ひしにはや一年となりぬ袖は涙に濡れて今も尙現世にれはしますらむ心地ろすなるなつかしの姉君よなどて夢にのみ來まして現には見え給はざる幽明の隔はあれど語らまほしき事の數々侍り母上が眼の病はきのふけふ衣縫ふやうに清々しうなり給ひぬかの八重子の君はことしの春花の都のさる方に嫁ぎ給ひぬ春枝の君は高等女學を卒業し給ひぬ秀次郎はいとゞ大きうなり今は高等小學の課程に餘念なきも折々姉君慕はしといませしむかしを語り出るもいとやさしう侍りあはれ姉君まづ何事をもすてゝ魂魄とやら此の世にれはしまさむこの靈祭の塲に來給へかし稻の露の處むかりなる手向には侍れど

八月兼題

- 五日
  - 歌……秋扇
  - 文……雜誌を讀む
- 二十日
  - 歌……女郎花
  - 文……夏期休業の感

（明治二十四年八月八日內務省認可
明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

本誌編輯上、都合有之候間、左の三回に限り、左の締切日限迄に、兼題原稿、御送附相成度候

八月五日の分は
七月廿五日締切

八月廿日の分は
八月十日締切

九月五日の分は
八月廿五日締切

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證券郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年七月四日印刷
同　年七月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行兼印刷人　川崎直衞

同　編輯人　山根勇藏

同　發行所（電話番號一九四六）國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）